

ぱいに食べ競った。鯨汁を作るところもあった。

若い男衆が行うものは、「ジョウバイシナガシ」や「カクセツ」などといった。宿を毎年交替し、大きな家で2、3泊して、餅をついたり、ウサギやニワトリの肉の手料理やドブロクを作り、夜通しで談笑した。また、このとき力比べのパンモチ（盤持ち）や、相撲を取ったりした。

女衆は「オケ（芋桶）ナガシ」があり、芋績み仲間が半日か1日、宿を決め持ち寄りで一年の慰労を行い、世間話に興じた。

高齢の女たちが楽しみにしていたのは「ジュズナガシ」で、宿に集まって大数珠を操って念佛を唱え、1年の疲れを癒すとともに親睦を深めた。

(才) 祝い唄「天神ばやし」

この地方の宴席は、「天神ばやし」の齊唱によって始められる。その音頭を取ることを「コエチラカシ」と称するのは、春耕に先立って堆肥を田んぼにまき散らす作業と、祝宴の皮切りに歌声を響かせることを掛けた、いかにも稻作に生きる農民らしい命名である。「天神ばやし」の唄い方は、歌詞や曲調のほか返し唄の用い方など、地域によって変化に富んでいる。

「天神ばやし」のルーツは、今から600年ほど前に上総地方（現千葉県）で神事唄として唄われていたものが、次第に作業唄・労作唄として一般に広がり、関東一円から甲州・信濃に入り、木曽谷や千曲川沿いに伝わり、江戸時代の半ば頃には祝い唄に移行し、定着していったものと考えられている。

「天神ばやし」は、市内では十日町地域・川西地域の全域、中里地域は七川以北、松代地域は伊沢・峰方・南部地区に伝わっており、松之山地域には伝承されていない。市外では津南町、小千谷市、高柳町（現柏崎市）、長岡市蓬平、小国町・山古志村（現長岡市）、堀之内町・小出町・広神村（現魚沼市）、大和町・六日町・塩沢町（現南魚沼市）などに分布している。

(力) 雪を楽しむ

「雪を敵とせず 友としよう」という発想の転換から生まれたのが「十日町雪まつり」である。

昭和22年(1947)10月、昭和天皇が県内をご巡行された際に、中山龍次十日町町長と高橋喜平農林省林業試験場十日町試験地主任が雪と雪国のことをご進講した。その際に陛下から「何か雪国を明るくするような話はないか」とのご下問があったが、明快なお応えができなかった。

この昭和天皇のひとことがきっかけとなり、当時、十日町文化協会の会長をしていた高橋が、仲間とともに雪国を明るくする運動を始めようと語り合う中で創案されたのが「雪まつり」である。昭和25年(1950)2月4日、5日に十日町文化協会が主催して第1回の雪まつりが開催された。主なイベントは、雪中カーニバルと雪の芸術作品展示会、町内対抗スキー競走大会であった。雪の芸術展では、町の広場や道路のいたるところに、町内や職場の仲間で趣向を凝らした雪像が35基立ち並んだ。2日目は快晴に恵まれ、青空の下にそそり立つ白銀の輝くばかりの



写真2-20: 第1回雪まつり雪の芸術作品「農家の冬」(昭和25年)

美しさは、観客に大きな感動を与えた。こうして、2年目からは雪の芸術展が中心となり、各製作団体が着想・技巧に工夫を凝らし、繊細で巧緻な技術の粋を凝らした技巧派作品と、豪壮雄大なスケールの大規模作品に分化して、観客の高い評価を得るようになった。

オ. 伝統文化

(ア) 機織り

雪が降ると家の中が仕事場となる。近世における女の冬仕事は縮を織ることであった。青苧の纖維を小指の爪で細く裂き、先端のつなぐ部分は歯を使ってさらに細くしてから、これらをつないで撚りをかけて糸にする。それを地機にかけて織り上げる辛苦の多い仕事で、一冬に1人1反が標準的な生産量であった。

冬は湿度が高いことや雪の漂白作用を利用した雪晒しなど、雪国は縮生産にとって好条件であった。江戸時代後期の塩沢の縮商人鈴木牧之は自著『北越雪譜』の中で「雪中に糸となし、雪中に織り、雪水に洒ぎ、雪上に晒す。雪ありて縮あり、されば越後縮は雪と人と氣力相半ばして名産の名あり。魚沼郡の雪は縮の親といふべし」と記している。

「越後縮の紡織用具及び関連資料【国指定重要有形民俗文化財】」2,098点は、越後縮の紡織用具を中心に、縮の製品や生産・流通等に関する資料及び生産者であった女性たちに関する関連資料をも網羅して全体を構成し、体系付けたものである。

(イ) ワラ仕事・竹細工

冬の男の主な仕事はワラ仕事であった。ワラやスゲなどを材料にして、家族が使う履物や被り物、日用品、春からの農耕に使う用具類など、自給自足を原則とする農家の暮らしには必要不可欠なものをつくった。

竹細工も冬の男の仕事であったが、ワラ仕事が自家用品の製作を主な目的にしていたのに対し、竹細工は換金を目的としていた。これらの製品は「節季市」で売られ、貴重な現金収入になった。

(ウ) 節季市

文化2年(1805)の「十日町組地誌書上帳」には、12月5日・10日・15日・20日・25日・30日に節季市が開催されていたことが記されている。節季市は近在の農家の人が家で作ったワラ細工、竹細工、木工品、金物、穀物や野菜類などの日用品を持ち寄って売り、自分たちもまた正月用品を町で買い求めた。

現在は1月10日・15日・20日・25日に開催されており、そこで売られるしん粉細工の人形「チンコロ」は、縁起物として今も人気を集めている。



写真 2-21：節季市

カ. 昔話・伝説・雪に関わる俗信

(ア) 昔話

「秋ゴトムカシノ正月バナシ」ということわざが市内に伝わっている。これは、稻作や畑の取り入れが済んだ後に行うアキゴトに昔話を語り、予祝行事の多い十五日正月に昔話を語られることを表わしている。

(イ) 伝説

伝説は、実在的・具体的な事物や事象と結びつきながら展開していくという特色を持つ。市内には、中里地域の「田代の七ツ釜【国指定名勝・天然記念



写真 2-22：鏡ヶ池【市指定地域文化財】

物】にまつわる「七ツ釜と片目の魚」や、松之山地域の中尾の「鏡ヶ池【市指定地域文化財】」のほとりに大伴家持が篠原刑部左衛門と名を変えて住んだという「松山鏡」などの伝説がある。

(ウ) 雪に関わる俗信

多くの所で「カマキリが巣（卵塊）を高い所につくると大雪、低い所につくると小雪」、「蛙（ギャク、ゲエロ）が土の深い所にいれば大雪、浅い所にいれば小雪」、「ツバキのつぼみが上向きだと小雪、下向きだと大雪」などの伝承が聞かれるが、その後に「あてにはならないけれど」と付け足されることが多い。

集落から見える山に雪が3回降ると、根雪が降るというのは、どの地域でも伝えられている。山は地図に名前の載っていない近くの山もあれば、少し離れた、その地域でミヤマ（深山）と呼ばれる奥山や、八海山・黒姫山などの山もあり、それぞれである。

キ. 雪に対する思い

(ア) 聞き取り調査から把握した雪に対する思い

十日町市歴史文化基本構想を策定するにあたり、豪雪地十日町に住み継いできた人々の「雪との関わり方や雪に対する思い」を把握するために聞き取り調査を実施した。その調査のまとめから人々の雪に対する思いを抜粋する。

「冬は本当に雪との戦い」と実感を込めて語られる言葉の裏に、これまで経験してきた冬の労苦の厳しさが強く感じられる。毎日降る雪で、屋根の雪をみな掘っても、後ろを振り返るともう雪が積もっている状況での気持ちは、「雪が1週間も降ると、どうでも空を恨む。あけてくれても雪が降って、いくら雪掘りしてもきりがない」という言葉に表れている。しかし、一方で「それが仕事だった」と割り切り、「あきらめてもいるし、（他の生活を）知らないから当たり前だと思っている」から「難儀には難儀だけれど、それでも何十年もやっていても、それほどいやだとも思わなかった。生活の一部だった」と言い切るとき、そこには諦観だけでなく、雪とのたたかいの中で形成された生活を持続させる仕組みの存在と、それによって生かされてきた経験の蓄積を感じとることができる。

そのような冬の生活があればこそ、雪が降り止まり、春めいてくると、雪から解放される喜びも大きく、それが言葉のはしばしにあふれてくる。「土からほわほわ湯気が立つていると、雪から解放された気がした」と、白一色だった雪の中に土の色が見えるうれしさを語る。春になれば、ハルキヤマやコエヒキ、苗代作りと、次から次へと仕事があったのだが、それでも、外で仕事をしていて汗が出るのがうれしく感じたという。厳しい労働に勝る春への強い思いは、雪のない地方では理解できない季節に対する鋭い感覚を伴っている。春先にあちこちで起きるナゼ（全層雪崩）の音も、それが落ちないと春が来ないといい、春到来を告げる合図だった。「冬うち雪で苦労してても、その時期になると、この辺みたいにいい所はない」という思いは、この地域でくらしている人たちの生活実感であったろう。



写真2-23：聞き取り調査（平成28年11月、仁田）

(イ) アンケート調査から把握した雪に対する思い

地域の人が大切に思っている事柄を把握するために実施したアンケート調査では、「大切に思う地域の自然環境」という設問において、80歳代の男性が「四季の移り方」をあげ、大切に思う理由として次のように答えている。「春の草木の芽吹き、残雪の中の青い新芽の輝き 夏はいろいろの草木の緑、花の色があざやかに映って美しい 秋の山々の色の移り変わりは大変きれいです 初雪は木の緑の上に白く朝日に輝くときは、苦しい冬の始まりと思いながらも、目を輝かせて見ていています」。これは原始から現代に至るまで、この豪雪地に住み継いできた人々に共通する思いではないだろうか。

そして、「十日町市史資料編8 民俗」には、「雪の降る直前になると、雪おろしと呼ぶ地響きにも似た雷が鳴り響くが、こうなると誰もが雪の到来を覚悟する。(中略)人々は初雪を迎えて何やら安堵に似た気持ちを覚える」と記述されている。

② 歴史的変遷

ア. 原始・古代

(ア) 自然と共生した縄文人のくらしと火焔型土器

十日町市を含む中魚沼・東頸城地方一帯で人類の活動が始まったのは、河岸段丘上の様々な場所で石刃・石槍・細石器などの石器類が出土していることから、後期旧石器時代と見られている。

縄文時代の遺跡は、田沢・中林・壬遺跡などの貴重な縄文時代草創期のものを含め、300か所を超えている。中でも最も数の多い中期(5500～4500年前)の遺跡からは、火焔型土器が特徴的に出土している。特に笹山遺跡出土の土器群は平成11年(1999)に縄文土器としては初の国宝に指定されている。縄文時代の遺跡が当地方全域にわたって分布しているのに比べ、それに続く米作りの文化を伴った弥生時代の遺跡はわずかで、城之古遺跡、牛ヶ首遺跡、千溝遺跡など数か所に見られるだけとなっている。また、古墳時代から奈良・平安時代を経て平安時代末期に至る古代の歴史は、史料に乏しくほとんど不明である。

(イ) 機織りのはじまり

平安時代の魚沼郡には賀禰、那珂、芦上、千屋の4郷があつて、このうち那珂郷がこの地方にあたると考えられている。なお、松代・松之山地域は頸城郡に属し、頸城郡十郷のうちの五ヶ郷内に入っていたと思われる。

昭和49・50年(1974・1975)、西小学校の建設に伴い、古墳時代から奈良・平安時代に及ぶ大規模な集落跡が発掘調査され、当地方の古代史を解明する鍵として注目を集めた。この遺跡は馬場上遺跡と呼ばれ、発掘調査の結果、堅穴住居跡が50軒、掘立柱建物跡が8棟ほど確認されている。出土した遺物には大量の土師器や須恵器などの土器、鉄製品のほか、首飾りに使われた石製の勾玉や管玉があり、また糸に擦りをかける時に使われる紡錘車という道具や織物の圧痕が付いた土器なども出土し、機を織る技術を持っていたことが分かる。遺跡の年代については、おおまかに古墳時代中期・後期(5～6世紀)、奈良・平安時代(7～9世紀)の長期にわたって集落が営まれていたと考えられている。

(ウ) 人々の祈り

奴奈川姫を祀る犬伏の松原神社には遠く飛鳥時代(7世紀)に遡る伝承があり、四日町の神宮寺は大同3年(808)、坂上田村麻呂の発願で前年に来迎されたご本尊を祀るために開創されたと同寺の縁起は伝えている。本尊の「木造十一面千手観音立像【県指定有形文化財】」は藤原時代(12世紀)の作である。同様の来迎伝説は友重の長徳寺本尊・観音像にも認められる。十日町の諏訪神社は創立年不明であるが、承徳・天永年間(1097～1112)に信濃川の洪水のため、川原から現在の諏訪山山頂に移されたとの伝承もあり、この時代に既に相当の集落が市域内に形成されていたことを推測させる。

イ. 中世

(ア) 大井田氏を中心とする新田氏一族の進出と、越後南朝方の拠点

波多岐庄とか妻在(有)庄と呼ばれていたこの地方の歴史が、史料上でようやく明らかになるのは鎌倉時代初め(12世紀後半)頃からである。この時代、松代・松之山地域は国衙領で松山(松之山)保と呼ばれていた。名湯として知られる松之山温泉の開湯は南北朝時代(14世紀中頃)と伝えられている。

養和元年(1181)、越後平氏の城助職(長茂)が越後守に任せられ、当地方もその支配を受けることになったが、まもなく城氏は木曾義仲に敗れ、鎌倉の將軍源頼朝にもそむいて没落していった。続く鎌倉時代、越後は源頼朝の関東知行国になったが、やがて上野国(群馬県)より新田氏一族の里見氏系である大井田氏、下条氏、中条氏、小森沢氏、羽川氏、田中氏、鳥山氏、倉俣氏、上野氏などがこの地方に進出して勢力を広めた。特に大井田氏は奥信濃(長野県)の豪族市河氏と姻戚関係を結ぶなど、この地方の中心的な勢力であった。

大井田氏を中心とする越後新田氏一族は、元弘3年(1333)の惣領新田義貞の鎌倉幕府倒幕挙兵に真っ先にはせ参じて以来、建武の中興から南北朝時代に至る動乱の時代に終始一貫して南朝のために働いた。特に延元元年(1336)の備中福山城(岡山県総社市)の合戦で大井田氏絶率いる2,000騎の軍勢は、足利直義の大軍を相手に奮戦して勇名をとどろかせた。越後新田氏一族は新田宗家と共に南朝の股肱として近畿、北陸、関東へと各地を転戦した。

「大井田城跡【県指定史跡】」や「節黒城跡【市指定史跡】」、坪野館跡を始め市内に残る約40か所の城跡や館跡の多くは、当地方が新田義宗(義貞の子)を盟主に仰ぎ、越後南朝方の拠点となつた当時のものと考えられている。また、川西地域に多く残されている自然石を利用した板碑も南北朝時代のもので、碑面の8割に阿弥陀如来、阿弥陀三尊を表わす梵字が刻まれている。

しかし、神宮寺の伝法自天王背板裏面墨書銘には、応安3年(1370)という北朝年号の記銘があり、2年前新田義宗討死を受けて越後南朝方の組織的抵抗が終息し、長年続いた南北朝戦乱から平和が訪れた当時のこの地方の状況を推測させる。

(イ) 上杉家の支配と上杉謙信の関東経営のための拠点

越後における新田氏と南朝方の勢力が上杉氏との戦いにより衰退していくと、新たに幕府から越後に山内上杉氏が派遣された。その結果、大井田氏、羽川氏、中条氏、下条氏、小森沢氏、倉俣氏、上野氏など南北朝期を生き延びたこの地方の越後新田氏一族は、上杉家被官として編成され、千手の下平氏などと共に室町・戦国時代に登場する。

室町期の越後の支配関係は複雑で、関東管領山内上杉家と越後守護上杉家の所領が入り組んでいたが、室町時代半ばから妻有庄は関東管領の支配下に置かれた。やがて、守護上杉家の家臣府内長尾氏が台頭し守護代として実権を握ると、長尾為景の代には守護上杉房能を自害させ、擁立した上杉定実の実権を奪い実質的国主の座に就く。松之山の「上杉塚跡(管領塚)【市指定地域文化財】」は、為景に追われて敗走中に自刃した上杉房能終焉の地である。

為景の子景虎(のちの上杉謙信)は越後一国を統一し、永禄4年(1561)関東管領職を上杉憲政より譲り受け、山内上杉氏の名跡も継いだ。関東管領職を継いだ上杉政虎(謙信)は、関東経営のため度々関東に出兵する。居城春日山城から市内の松代～城之古～六箇を抜け塩沢に出て三国街道を行くルートは松之山街道と呼ばれており、関東へ抜ける軍用道路として重要視された。室野城・松代城・犬伏城・琵琶懸城・秋葉山(羽川)城などはこの街道の要所に築かれた城である。街道の一部、菅刈から犬伏・薬師峠までの古道は「歴史の道百選」に選定されており、犬伏の松原神社には室町・戦国時代の遺品も残されている。

上杉謙信とその養子景勝の代に上杉氏の威勢は伸長し、慶長3年(1598)に上杉氏が豊臣秀吉によって会津(福島県)に移封されるまで、豊臣政権の重鎮として越後を治めた。

ウ. 近世

(ア) 幕府領から会津松平家の支配

上杉氏会津移封後の越後国には堀秀治が封ぜられ、江戸時代になると松平忠輝の支配を受ける。その後、江戸時代を通じて幕府の越後支配体制は、その大名統制政策などによって細分化され統治者の交代もしばしば行われた。延宝9年(1681)6月、越後騒動によって高田藩主松平光長が改易されると、当地は高田藩領から幕府領となり各地に置かれた幕府代官所の支配を受けた。享保9年(1724)閏4月、魚沼郡は川口組を除いた7組が会津藩預りとなり、以後、一部の変動はあるが、江戸時代を通じてほとんどが会津松平家の支配下に置かれた。ただ川西地域の一部は寛保元年(1741)高田から白河、桑名へと転封となつた久松松平家の飛び領として同家柏崎陣屋の支配を受けていた。一方、頸城郡である松之山郷は長岡藩・高田藩預りの一時期を除き幕府領となつた。

(イ) 越後布から越後縮、そして絹織物へ

越後の麻織物の生産は古い伝統を持ち、正倉院御物の中に天平勝宝年間(749~756)に越後から朝廷に献上された「越布」が存在し、平安時代の『延喜式』にも越後から布が納められたことが記されている。また、長保元年(999)と同2年には、役所や貴族の下働きの者たちが白越(越後布)を着用することを禁止する法令が出たり、建久3年(1192)源頼朝が征夷大将軍宣下の勅使に越後布を贈ったりするなどの記録が見え、越後の麻織物は古くから優品であったことが分かる。さらに、越後は麻織物の材料である青苧の生産も盛んで、室町時代には流通組織として京都の三条西家を本所とした青苧座が組織され、戦国時代には長尾(上杉)氏がその権利を掌握し、青苧生産を奨励した。

寛文年間(1661~1672)の頃、播州明石から來た明石次郎なる者が、古くから魚沼で織られていた白布などをもとに、糸に強い撚りを加え織を出し、また紋彩を織り出すことに成功し、これが越後縮の創始となつた。越後縮は武家はもとより夏の高級着物として庶民の間にも需要が増大し、天明期(1781~1788)には魚沼地方で年間20万反の生産があつたと記録されている。

こうした生産の増大から、延宝元年(1673)には縮市場が開設され、十日町は小千谷、堀之内とともに縮の三市場として繁栄した。この動きに対し、江戸幕府は宝永6年(1709)に縮・木炉・糸・煎茶・白布・綿布・小白布の七品に運上請負制度を定め、税の増徴と安定を図るが、このうち大部分は縮にかかる役錢であったことからも、雪国の主要産物として縮が重視されていたことが分かる。

天明期をピークとして縮生産は漸次衰退し、替わって当地方でも養蚕と絹織物が勃興する。文政12年(1829)、京都西陣出身の機職人宮本茂十郎が従来の地機に代えて高機を導入し、透綾織(絹縮)の技術を伝えた。その後、透綾織が完成する明治初期までの30年間は、縮の生産販売を続けながら新製品について暗中模索する、十日町の絹織物草創期ともいべき試練の時期であった。この苦難の時期や明治33年(1900)の大火を乗り越えた十日町は、大正から昭和初期にかけて新しい機業地として発展をとげる。

(ウ) 近世の新田開発と俳諧の隆盛

江戸時代には農業技術も進み、新田開発も各地で盛んに行われた。当地方で天明元年(1781)に田沢の村山五郎兵衛の願い出から始まつた桔梗ヶ原の開田は大規模なものであった。寛政12年(1800)、幕府の巡檢使として田沢に逗留した金沢千秋は『越能山都登』を、同行した龜井協徳は『績麻録』を著し、当時のこの地方の様子や縮生産の具体的記述を今に伝えている。またこの時代、生産力の向上と縮商いの繁盛を背景に、文人墨客の往来も盛んで諸文芸の発達が顕著になる。特に俳諧の普及ぶりは市内各地の社寺に残されている献額にみることができる。

エ. 近代・現代

(ア) 明治の町村合併

明治元年(1868)、魚沼郡は小千谷民政局、頸城郡は川浦民政局の下に属したが、その後幾度かの変遷を経て、現在の新潟県の体裁が整えられたのは明治6年(1873)6月のことである。同12年(1879)に郡区編成法が施行され、魚沼郡は南・中・北の3郡に分けられて、十日町・川西・中里地域は中魚沼郡に属した。また、頸城郡は東・中・西の3郡に分けられ、松代・松之山地域は東頸城郡に属している。

明治22年(1889)市制・町村制が敷かれ、さらに村の分合が行われて自治区が定められた。同30年(1897)十日町村は十日町となり、同34年(1901)11月の町村合併後、中魚沼郡は多少の変動を経て22か町村となって存続するに至る。東頸城郡でも同様の動きがみられ、明治22年(1889)の33村が同34年(1901)11月の合併後には14村となった。

(イ) 織物業の工場制工業への発展と戦後の復興

十日町織物は明治20年代になると染色や撚糸技術の改良進歩とドビー・ジャカード機などの新機械の導入によりめざましい進歩をとげた。積極的な新製品研究・開発の結果、大正から昭和の初期にかけて一世を風靡した明石ちぢみや、意匠白生地を世に出して絹織物産地としての確固たる地位を築いた。昭和4年(1929)、「越後名物数々あれど明石ちぢみに雪の肌…」と唄われる十日町小唄が作られる。同年には現在の飯山線が全線開通し、当地方の動脈として重要な役割を果たすことになった。昭和14年(1939)、川西地域にある国鉄(現JR東日本)の水力発電所が完成し、東京の山の手線への電力供給が始まる。しかし、時代はやがて戦時体制に移行し、奢侈品禁止令や織機の供出などにより十日町織物産地も大きな打撃を受けて終戦を迎える。

戦後とそれに続く高度成長期に、マジョリカお召や黒絵羽織等をヒットさせた織物業界の躍進もあって、十日町は国内有数の和装産地に成長したものの、その後の苦しい不況も経験して、新しい時代に対応する各種の施策を展開してきた。

(ウ) 昭和の町村合併

昭和28年(1953)3月に町村合併特例法が制定された。昭和29年(1954)3月に十日町は近隣3村と対等合併し市制を施行。その後3村が合併して市域を形成した。同年同月、2村が合併して松代村(昭和29年(1954)10月に町制施行)となる。昭和30(1955)年3月には2村が合併して中里村となり、同年同月に2村が合併して松之山村(昭和33年(1958)11月に町制施行)となった。そして昭和31年(1956)9月に4町村が合併して川西町が成立した。

(エ) 新十日町市の成立

平成9年(1997)3月、昭和6年(1931)に松代で始まった建設運動から実に六十余年の歳月を経て、首都圏と北陸・関西圏を結ぶ「ほくほく線」が開通した。

平成12年(2000)からは、昔、妻有と呼ばれた中魚沼地方と、ほくほく線で結ばれた西隣りの東頸城郡松之山郷が一体となり、この地域の里山と現代アートの融合をテーマにした意欲的な試みである「大地の芸術祭」が始まった。

平成17年(2005)4月、こうした交流や地域の結びつきを基に、十日町市、川西町、中里村、松代町、松之山町が合併して新たな十日町市となった。

③ 歴史や文化に関する施設

ア. 十日町市博物館

十日町市博物館は、昭和 54 年(1979)4 月に開館し、「雪」「織物」「信濃川」をテーマに、地域の歴史と文化を中心とした展示を行っており、市の生涯学習の拠点として位置付けられる。施設内には、平成 11 年(1999)に縄文土器として初めて国宝に指定された「新潟県笛山遺跡出土深鉢形土器【国宝】」や「越後縮の紡織用具及び関連資料【国指定重要有形民俗文化財】」、「十日町の積雪期用具【国指定重要有形民俗文化財】」などの文化財を展示している。

博物館では、博物館講座、古文書入門講座等の歴史や文化財について学ぶ活動を展開しているほか、学校教育における博物館活用の促進として、授業に伴う展示説明や、学校への出前授業、職場体験の受け入れ等を実施している。「博物館友の会」は、博物館開館に先立って昭和 54 年(1979)に発足し、現在、植物・古文書・いしぶみ・歴史・方言・考古・近代史・着物・民俗の 9 つの研究グループが独自の研究活動を行い、成果を発表している。

また、十日町市博物館と「南魚沼市トミオカホワイト美術館(南魚沼市)」「鈴木牧之記念館(南魚沼市)」の 3 館で雪の文化を通じた姉妹館提携をしており、3 館共通の入館券・リーフレットの作成や共同の企画展の開催、スタンプラリー等の企画イベントを実施している。

なお、十日町市博物館は、平成 32 年(2020)に新博物館を開館予定である。東京オリンピック・パラリンピックを契機に地域文化を世界に向けて発信していく新しい拠点施設として建設が進められている。

イ. 文化財資料収蔵庫

十日町市では、十日町市文化財資料収蔵庫条例により、十日町市の歴史、民俗及び考古に関する資料を収蔵するため、博物館や資料館のほかに文化財資料収蔵庫を設置している。文化財資料収蔵庫は、現在、中里文化財資料収蔵庫、川西文化財資料収蔵庫、高倉文化財資料収蔵庫、高道山文化財資料収蔵庫の 4 か所に設置されている。

ウ. 市域に分布する歴史文化関連施設

市内には、地域の歴史文化に関する施設が分布しており、そのうちの主なものは表 2-10 のとおりである(図 2-12 参照)。



写真 2-24：十日町市博物館



写真 2-25：博物館内の国宝展示

表 2-10 : 十日町市の歴史や文化に関する施設（主なもの）

施設名	管理・運営	概要
松之山郷民俗資料館	十日町市	古民家を移築して資料館とした施設。雪国の生活民具や農耕用具等を展示して松之山の歴史や文化を紹介している。
まつだい郷土資料館	十日町市	移築された「旧室岡家住宅【市指定有形文化財】」を資料館とした施設。松茅神社の資料や雪国の生活用具等を展示している。
笹山縄文館	十日町市	「笹山遺跡【市指定史跡】」に整備された笹山遺跡広場内の施設。イベントや交流の場として利用されている。
越後松之山「森の学校」 キヨロロ	十日町市	市民を始めとした様々な主体と地域の自然・里山文化を調査・研究し、展示・教育・体験・里山保全・産業活性等に活用することで地域づくりを目指す科学館。
越後妻有里山現代美術館 「キナーレ」	十日町市	越後妻有地域の自然環境や風土等をテーマにした作品を展開し、越後妻有の多様な資源や大地の芸術祭の魅力を紹介する現代美術館。
十日町情報館	十日町市	図書館を中心にして、広域的な人の交流や、情報の受発信の機能を付け加えた新しい形の図書館。
越後妻有文化ホール・十日町市中央公民館「段十ろう」	十日町市	芸術・文化の振興を目的とした文化ホールと、生涯学習・社会教育の推進を目的とした公民館の複合施設。
十日町市市民交流センター「分じろう」	十日町市	1階は、文化財の展示などを行うまちの文化や歴史の「発信」の場となっており、2階は和のおもてなしによる「交流」の場となっている。
大棟山美術博物館	一般財団法人大棟山美術博物館	700年近い歴史をもつ村山家の旧宅と庭を博物館にしたもの。村山家の歴史、伝統や、前当主の叔父にあたる「坂口安吾」の遺品、書画、陶芸品等を展示している。
星と森の詩美術館	公益財団法人丸山育英会	郷土にゆかりの深い版画家 星裏一 ^{ほしじょういち} や人間国宝 天田昭次 ^{あまたあきつぐ} の日本刀、彫刻家 藤巻秀正 ^{ふじまきひでまさ} 等の作品を中心に展示する美術館。
あてま森と水辺の教室ボボラ「森のホール」	株式会社当間高原リゾート	当間高原の動植物や生態系の調査・研究結果を踏まえた里山の自然・文化・暮らしについて展示・紹介する施設。

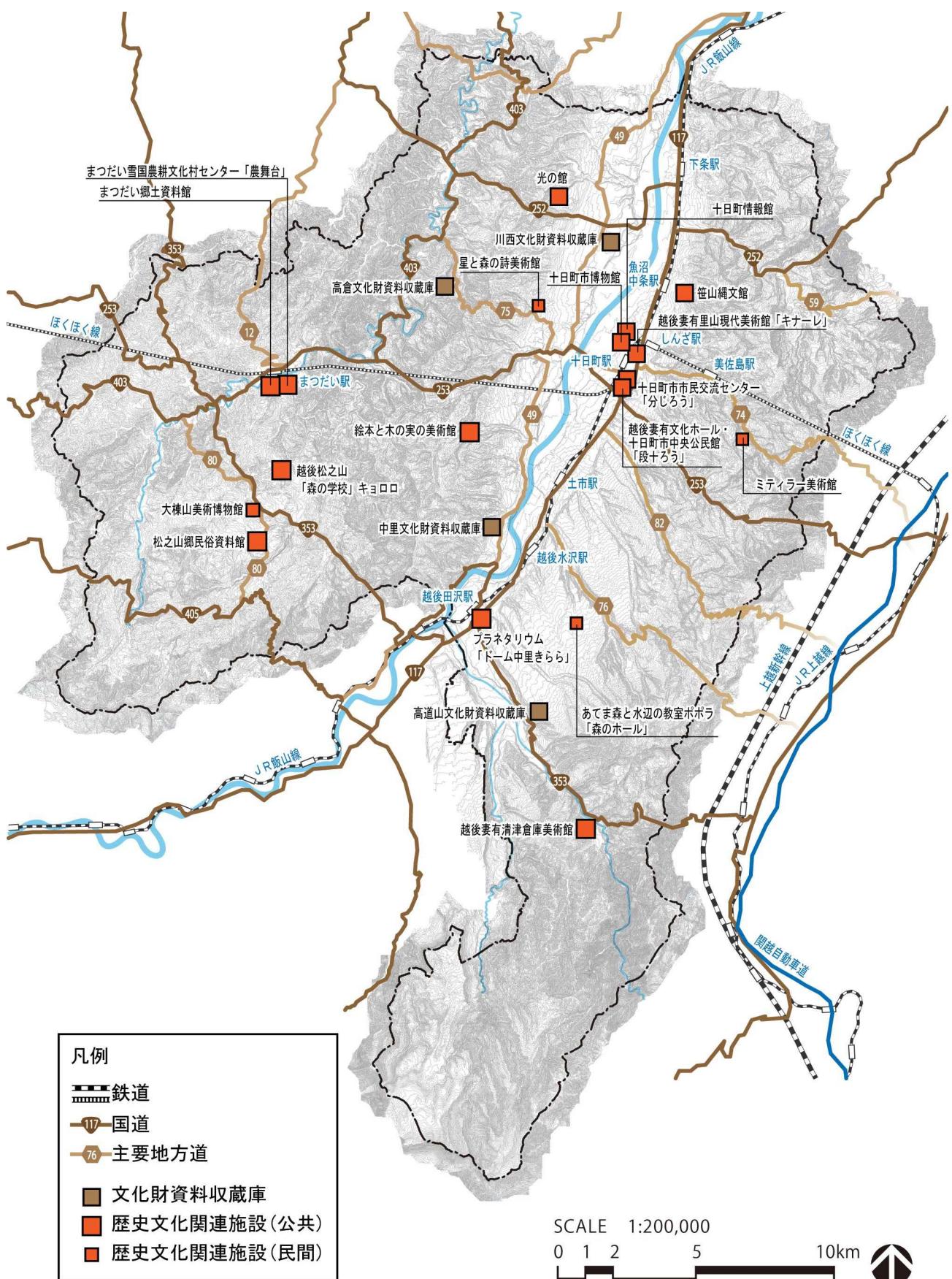


図 2-12：十日町市の歴史や文化に関する施設

(4) 地域別の特徴

平成 17 年(2005)4 月 1 日に旧十日町市、川西町、中里村、松代町、松之山町の 5 つの市町村が新設合併して誕生した十日町市は、地域単位で固有の歴史や文化を有している。地域に点在する文化財等は各地域で培われてきた歴史や市民の生活に密接に関わっていることから、地域別に歴史文化の特徴を整理する。

表 2-11：地域区分

地域	平成 17 年 3 月 の市町村名	昭和 29 年 3 月 30 日（昭和の大合併前）の町村名
十日町地域	十日町市	十日町、中条村、川治村、六箇村、吉田村、下条村、水沢村、貝野村の一部
川西地域	川西町	仙田村、千手町、橘村、上野村
中里地域	中里村	倉俣村、田沢村、貝野村の一部
松代地域	松代町	松代村、山平村、奴奈川村
松之山地域	松之山町	松之山村、浦田村

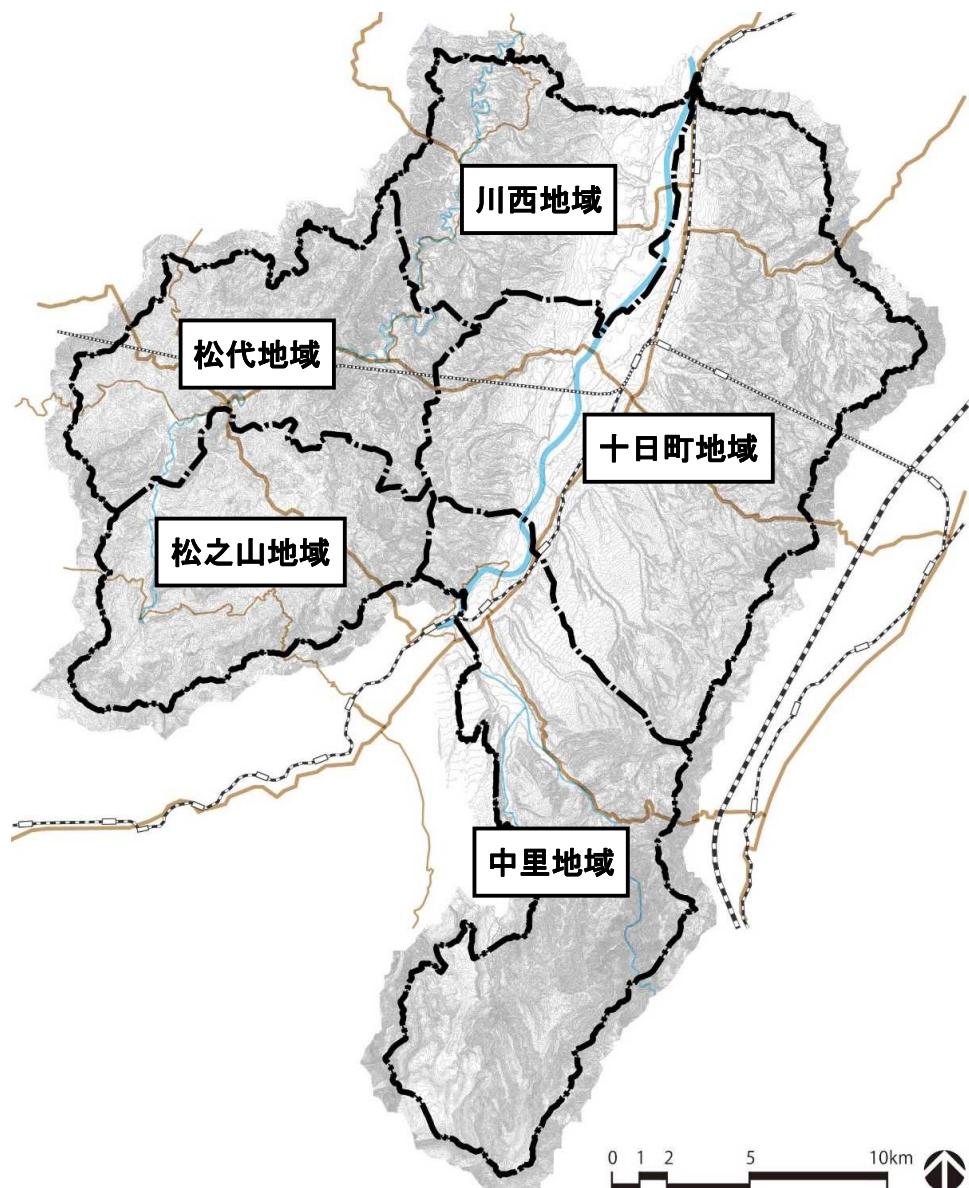


図 2-13：十日町市の地域区分図

① 十日町地域

十日町地域は、東部に魚沼丘陵、西部に東頸城丘陵があり、両丘陵に挟まれて中央に細長い盆地が形成されている。その中心部をほぼ南から北に向かって信濃川が流れている。信濃川の流れは丘陵地のふもとに雄大な9段にわたる河岸段丘を形成し、この河岸段丘の段丘面は原始時代から生活の舞台になっている。

縄文時代前期から晩期までの多彩な縄文遺跡群に代表される縄文文化のほか、弥生時代の城之古遺跡からは糸に燃りをかける紡錘車が出土し、古墳から奈良・平安時代の馬場上遺跡では布の痕がついた土師器が見つかっており、当地域の織物の始まりの古さを物語っている。そして、青苧を材料とした織物は中世には越後布、近世には越後縮と呼ばれ、一大生産地となった。近世末から絹織物に転換を図ったあとは、明石ぢぢみや意匠白生地、マジョリカお召などのヒット商品の開発に成功し、織物産業は戦前・戦後を通じて地域の主産業となった。その後も、後染めへの進出を行い織りと染めの総合産地を実現した。

地域内には、県内唯一の国宝である火焰型土器群が出土した「笹山遺跡【市指定史跡】」や、県指定史跡の大井田城跡、県や市の指定文化財を多く所有する神宮寺があり、原始及び中世の歴史に関する文化財が多く所在する。



写真 2-26：神宮寺観音堂【県指定有形文化財】

② 川西地域

川西地域は、面積のほぼ半分が関田丘陵東側にあたる信濃川左岸地域で、8段にわたる河岸段丘が良好に発達している。千手面と呼ばれる川西地域で最も広い面積を占める段丘面は、信濃川からの比高が50m以上あり、信濃川からそそり立つ段丘崖は独特の景観をなしている。関田丘陵の分水嶺は信濃川からの奥行きがあまりなく、段丘に開かれた田畠を潤す水は、丘陵に刻み込まれた沢に設けられた溜池により貯われてきた。近世における地域最大の築堤事業は、万延元年(1860)に出願され慶応3年(1867)に完成した五升苗堤の築堤で、古田用水の確保と新たに開く20町歩(19.8ha)に及ぶ水田の用水として企画された。



一方、関田丘陵の西側は仙田地区と呼ばれる渋海川沿いの地域であり、河岸段丘はほとんどみかけず、集落は渋海川に沿って形成された狭い土地や、古い時代に発生した地すべりなどにより丘陵斜面に形成された沢あいの平坦な土地に発達している。渋海川は地形上から蛇行が多く、仙田地区では近世中期頃から、曲流部を直流させて瀬替新田が開かれてきた。



地域内には、「節黒城跡【市指定史跡】」や南北朝時代に建てられた「自然石板碑 32 基【市指定有形文化財】」などの中世に関する指定文化財が多く所在するほか、「星

写真 2-27：星名家住宅雪穴【国登録有形文化財】

名家住宅【国指定重要文化財】や「^{きいきいじ}西永寺（本堂ほか4件）【国登録有形文化財】」、「^{だいにとうじまきいいん}第二藤巻医院（本館・石垣）【国登録有形文化財】」、「星名家住宅雪穴【国登録有形文化財】」など雪国の建築様式を伝える建造物がある。また、信濃川の水を利用して昭和14年（1939）に発電が開始された鉄道省（現JR東日本）千手発電所がある。

③ 中里地域

中里地域は、南東側に魚沼丘陵、北西側に東頸城丘陵があり、集落の大部分は信濃川と清津川によって形成された河岸段丘上にある。河岸段丘は信濃川右岸によく発達し、10段が確認される。清津川の上流には上信越高原国立公園の「清津峡【国指定名勝・天然記念物】」が、清津川支流の釜川上流には苗場山麓ジオパークの見どころとなるジオサイトの1つになっている「田代の七ツ釜【国指定名勝・天然記念物】」がある。さらに、田代の七ツ釜の南方には新潟県自然環境保全地域に指定されている小松原湿原があり、美しい自然景観が楽しめる地域である。

また、信濃川と清津川の合流点付近には、壬遺跡・田沢遺跡・中林遺跡などの縄文時代草創期遺跡群が分布しており、1万年以上続いた縄文文化の形成過程を知る上で重要な場所となっている。

近世には、清津川右岸の新田開発が行われ、用水確保のために河岸段丘の崖腹等に全長9kmに及ぶ水路を掘り、桔梗原に水田を開いた。昭和41年（1966）この水路を改修してさらに上段の段丘面まで用水をポンプアップすることに着手し、昭和48年（1973）には約240haの水田がつくられた。

清津川上流には東京電灯会社（現東京電力）湯沢発電所が建設され貯水を始めたため、大正13年（1924）になると水量が激減した。一方、信濃川では、鉄道省による信濃川水力発電所の建設工事が昭和7年（1932）に始まるとき、貝野村宮中に取水口が設けられた。これにより、貝野村の漁獲量は昭和7年の2,106貫目（7897.5kg）から翌年には170貫目（637.5kg）まで激減し、河川漁業は壊滅的な打撃を受けた。

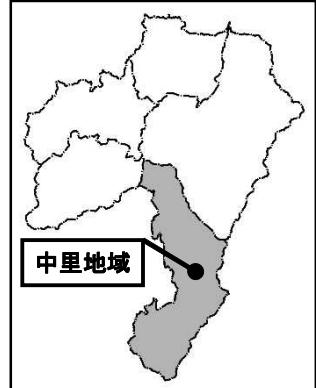
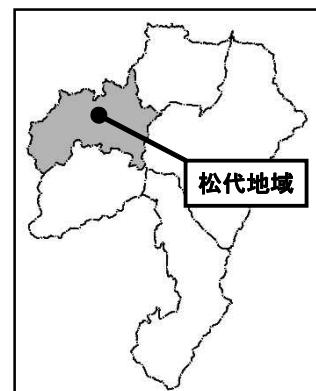


写真2-28：清津峡【国指定名勝・天然記念物】

④ 松代地域

松代地域は、東頸城丘陵の中に位置している。この丘陵は、数百万年から数十万年前の比較的新しい地質時代に堆積した浸食されやすい地層でつくられている。そのため、丘陵地帯には複雑に入り組んだ谷が発達している。その谷の中には狭い谷底平野がつくられたり、河岸段丘が小規模ではあるが発達し、地すべりによってできた緩斜面が見られる。地域の集落は、丘陵の斜面に位置するものと、渋海川に沿って分布する平坦地の上に位置するものがある。

河川は南側に隣接する松之山地域から流れてくる渋海川が主流となっており、支流である越道川が地域の東部で渋海川に合流している。また、



北西部には鰐石川の上流部が位置している。地域内の渋海川は多くの蛇行が発達している。蛇行によって狭くなったところを人工的に切断する瀬替えを行って新田開発することが近世末から明治初期に行われ、丘陵地帯で新田開発に注いだ農民の努力の跡を残している。

東頸城丘陵の地域は、日本でも有数の地すべり地帯であり、丘陵の斜面に分布する水田は、古い地すべり地を利用して造られている。このため、丘陵の斜面が一面に水田化され、美しい棚田の景観を誇っている。

犬伏の「松苧神社本殿【国指定重要文化財】」は明応6年(1497)の建立である。松苧神社には、上杉謙信が「短刀【市指定有形文化財】」や「軍配【市指定有形文化財】」を奉納している。

また、中世から近世にかけて重要な役割を果たした松之山街道の一部が、文化庁の「歴史の道百選」に選定されている。

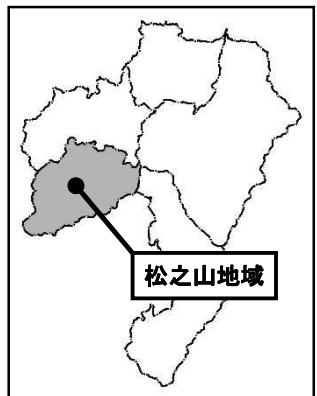


写真 2-29 : 軍配【市指定有形文化財】

⑤ 松之山地域

松之山地域は、南縁付近が関田山脈に含まれるほか、大部分は東頸城丘陵の中に位置している。そのため、松代地域と同じように浸食されやすい地層で成り立っており、地すべり地帯である。そして、地すべり地形を利用した水田が多くみられ、美しい棚田の景観を呈していることも松代地域と同じである。

地域の集落の大部分は、中央部に位置する大松山(標高 672m)の麓の地形が緩やかな場所にリング状に分布する。そして、大松山を中心とした松之山ドーム構造の周辺に地すべり地帯が分布しており、昭和 37 年(1962)4月に始まった大規模な地すべりは 850ha にも及んだ。



河川は渋海川と渋海川の支流の越道川、越道川の支流の東川が、それぞれ地域の西部、中央部、東部を流れている。

南北朝時代に開湯伝説を持つ松之山温泉は、近世につくられた温泉番付表に「越後松之山の湯」として前頭に登場し、越後の温泉の中では筆頭の地位を占めていた。

松口の北、字外(そで)と呼ばれる丘陵には樹齢約 100 年のブナが約 3 ha に広がり、美人林と呼ばれて大勢の観光客や写真愛好家が訪れている。また、地域の南西部の三方岳(標高 1,138.5m)と天水山(標高 1,088m)の北方天水越には、約 50ha の「天水山麓のブナ原生林【市指定天然記念物】」が広がっている。

「婿投げ【市指定無形民俗文化財】」は天水越と湯本に伝わる小正月行事で、村の娘を嫁にもらった他村の婿が嫁同伴で藪入りの初泊まりになると、村の若者が婿を村はずれのお堂に背負っていき、御神酒をいただいてから婿を胴上げし、4~5mもある崖下の雪の中に投げ落すという荒っぽい行事である。湯本では、婿投げが終わると塞の神行事が行われ、灰と雪を混ぜて墨をつくり「おめでとう」と言いながらお互いの顔に塗り付ける「スミぬり【市指定無形民俗文化財】」が行われ、越後松之山の奇習として広く知られている。



写真 2-30 : スミぬり【市指定無形民俗文化財】

(5) 十日町市の歴史文化の特徴

十日町市の自然環境、社会環境、人文環境の特徴等を基に、十日町市の歴史文化の特徴について以下に整理する。

豪雪とともに生きてきた人々の知恵が育んだ歴史文化

～縄文時代から受け継ぐ「豪雪と共に生きるくらし」「豪雪を友とするこころ」～

縄文時代の温暖化によってこの地に大量の降雪がもたらされるようになったのは、今から8,000年前頃とされている。冬の到来とともに豪雪の中での生活を余儀なくされた人々は、雪に対する鋭い感覚を身に付け、様々な工夫を凝らして生き抜いてきた。雪を受け入れ、雪を活用して命をつなぎながら、雪に親しみ、やがて雪の中に楽しみを見出すようになった。

このような、豪雪と共に生きるくらし方と、豪雪を友とする精神は、縄文時代から現代の十日町市へと脈々と受け継がれている。

「豪雪」とともに生きてきた十日町市の歴史文化は、「豪雪が生んだ自然環境」と、「豪雪の中で育まれた歴史文化」によって、その特徴を語ることができると考える（表2-12参照）。「豪雪が生んだ自然環境」は、歴史文化を生み出した基盤である「川」「河岸段丘」「山」から成り、その自然環境の下「豪雪の中で育まれた歴史文化」が「先人達の営みの歴史」「生業の歴史」「雪国のかくらし」である。

それらの特徴は、それぞれが独立して成立してきたのではなく、自然環境と歴史文化が織りなす雪の結晶のように、「豪雪」を中心に互いに連関しながら、十日町市の歴史文化を形成してきた（図2-14参照）。

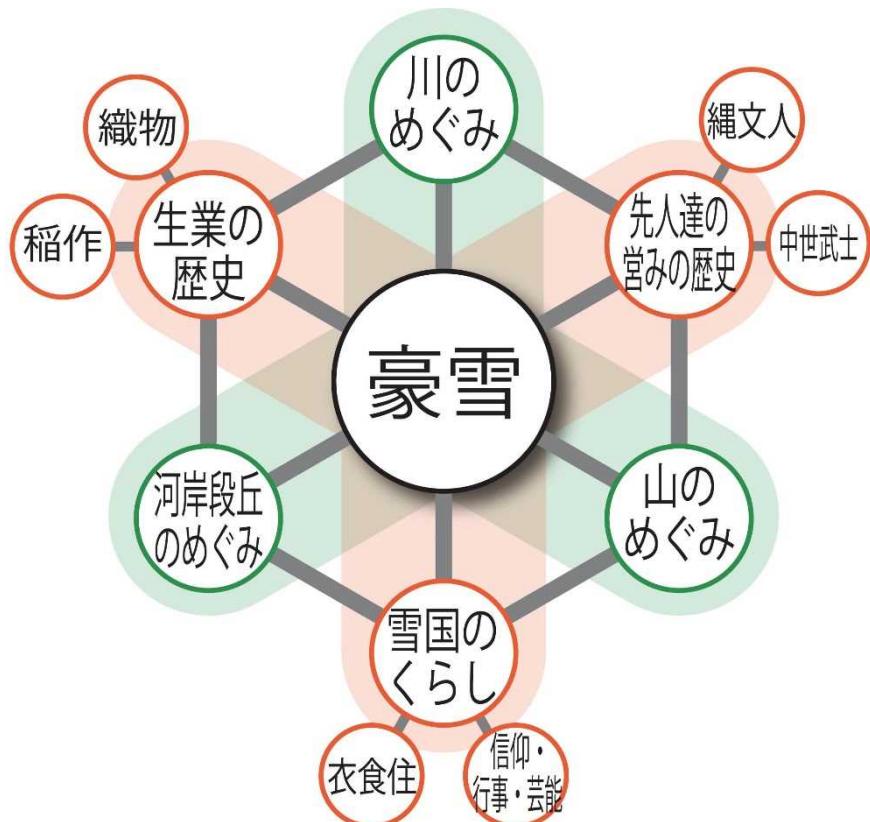


図2-14：十日町市の歴史文化の特徴の模式図

表 2-12 : 十日町市の歴史文化の特徴

①豪雪が生んだ自然環境 (人々の生活にめぐみをもたらす豊かな豪雪地の自然環境)	川のめぐみ	十日町市の中心を流れる日本一の大河信濃川や清津川、渋海川などの、雪がもたらす豊かな水のめぐみ ● 信濃川 ：かつての川漁、舟運（荷船・渡し船）から現代の水力発電など、十日町市の生活や産業の中心となってきた信濃川 ● 山間の溪流 ：山間地域の稲作を支える渋海川や、清津峡や田代の七ツ釜に代表される峡谷の景勝地
	河岸段丘のめぐみ	中山間地域の町場の生活や稲作等の生業の場として、貴重な平地となる信濃川流域に発達した河岸段丘のめぐみ
	山のめぐみ	十日町市の東側と西側に連なる丘陵の山々のめぐみ ● 山の幸（山菜・木の実） ：雪消えとともに山野に自生する山菜や、ブナやヤマグワ等の食用の木の実など、豊かな山林が生み出す山の幸 ● 水源涵養 ：ブナ林等の落葉広葉樹林の日陰が融雪を遅らせることによる豊かな水源や肥えた森林腐葉土の形成
②豪雪の中で育まれた歴史文化 (雪国の先人達の営みの歴史と時代の変遷とともに変化しつつ受け継がれてきた生活文化)	先人達の営みの歴史 (縄文人と中世武士)	雪国で始まった縄文人のくらしと、中世武士の戦い ● 縄文人のくらし ：国宝・火焔型土器が出土した笹山遺跡に代表される、数多くの縄文時代遺跡や出土品からうかがえる縄文人の豊かなくらしの歴史 ● 中世武士の戦い ：越後南朝の拠点となった鎌倉から南北朝時代や、上杉謙信の関東経営のための交通や要害の場所であった室町から戦国時代の地域の歴史
	生業の歴史 (織物と稻作)	雪国で発展した織物と稻作 ● 織物業 ：古代から現代まで、気候風土を生かし時代のニーズに合わせて発展した織物業の歴史 ● 稻作 ：棚田やマブ、瀬替え等の山間地域の稻作、河岸段丘の平地を中心に拡大した稻作等、地形を生かして発展した米どころの歴史
	雪国のくらし (衣食住と信仰・行事・芸能)	受け継がれる雪国の生活文化 ● 雪国の衣食住 ：半年余りに及ぶ雪に囲まれた厳しい生活の中で、雪を受け入れ、雪を利用して生活してきた人々のくらし ● 雪国の信仰・行事・芸能 ：米どころとしての秋の収穫の歓びと、冬の豊穣の祈りや楽しみ、伝統文化

3. 十日町市の関連文化財群

(1) 関連文化財群の設定の考え方

① 関連文化財群の設定の目的

関連文化財群とは、有形・無形、指定・未指定に関わらず様々な文化財等を歴史的・地理的関連性に基づき一定のまとまりとして捉えたものである。関連する複数の文化財等を、関連文化財群として捉え、一体的に保存・活用していくことは、文化財等の魅力を高めるとともに、魅力的な形でかつ分かりやすく価値を伝えていくための効果的な方法の一つである。

＜関連文化財群の設定の目的＞

- これまで市民の生活の中で、身近な存在であった様々なものを、著名な文化財と一体となった群として捉えることで、その価値を再度認識し、後世に残していくための保存・活用を図っていく。
- 十日町市の歴史や文化に興味・関心を持ち、理解してもらうために、歴史文化の特徴とそれらの物証となる文化財の価値を分かりやすく伝える。

② 関連文化財群の設定の考え方

十日町市の歴史文化の特徴と文化財の価値を分かりやすく伝えていくために、以下の考え方で関連文化財群を設定する。

＜関連文化財群の設定の考え方＞

ア 歴史文化の特徴に基づき、縄文時代から受け継ぐ「豪雪と共に生きるくらし」「豪雪を友とするこころ」をテーマに関連文化財群を設定する。

- ・十日町市の歴史や文化を理解してもらうため、歴史文化の特徴である「縄文時代から受け継ぐ『豪雪と共に生きるくらし』『豪雪を友とするこころ』」をテーマに関連文化財群を設定し、雪を受け入れ、雪を活用してきた「豪雪と共に生きるくらし」の物証となる文化財や、雪に親しみ、雪の中に楽しみを見出すようになった「豪雪を友とするこころ」の物証となるものを関連文化財としてまとめる。

イ 価値を分かりやすく伝えていくために、関連文化財群を歴史文化の特徴を語る「物語」として捉え、「物語」ごとにエピソードを紹介する。

- ・市内外の人々に広く興味・関心を持ってもらうために、関連文化財群を歴史文化の特徴を語る「物語」として捉え、十日町市の特徴を表わす「物語」のタイトルを設定する。
- ・関連文化財群の内容を分かりやすく伝えていくために、各「物語」を語る上で重要な話を「エピソード」として紹介する。

ウ 各「物語」に関連する様々なものを、文化財にとらわれずに「構成要素」として抽出する。

- ・十日町市の歴史文化の特徴に関連するものは、食文化に関わる山菜等や稻作等に関わる河川等、文化財として捉えることが困難なものも含まれるが、それらも文化財等と一体的に保存・活用していくことが求められるため、各「物語」に関連するものを「構成要素」として整理する。

(2) 関連文化財群の設定

歴史文化の特徴に基づき、関連文化財群を以下のように設定する。

表 2-13：関連文化財群

「豪雪と共に生きる暮らし」をテーマにした関連文化財群		「豪雪を友とするこころ」をテーマにした関連文化財群
物語 (関連文化財群) 歴史文化の特徴との関係		
雪国に住み継ぐ人々 ～実は豊かだった豪雪地～	<p>豪雪地の長い冬の間、家の内で女性は機織り、男性はワラ仕事をして、春の防寒を心掛けてきた。その冬仕事から市の産業として発展した織物業や、伝統的に引き継がれてきた道具や技術の物語。</p>	<p>豪雪地の長い冬の間、家の内で女性は機織り、男性はワラ仕事をして、春の防寒を心掛けてきた。その冬仕事から市の産業として発展した織物業や、伝統的に引き継がれてきた道具や技術の物語。</p>
物語 (関連文化財群) 歴史文化の特徴との関係	<p>豪雪地に住み継いできた人々の歴史や、その過酷な環境の中で自然と共生する先人達が生み出し、時代とともに発展・継承されてきた知恵や工夫の物語。</p>	<p>豪雪地の長い冬の間、家の内で女性は機織り、男性はワラ仕事をして、春の防寒を心掛けてきた。その冬仕事から市の産業として発展した織物業や、伝統的に引き継がれてきた道具や技術の物語。</p>
エピソード	<ul style="list-style-type: none"> ●雪と共に生息した縄文人 ●地形を活用した中世武士の戦いと祈り ●雪と闘う人々の知恵や工夫 	<p>十日町市の歴史文化の特徴の全てに関係する物語であり、エピソードは、自然景観や人々の営みが生まれた文化的景観や、繩文時代から豪雪の中で育まれた歴史文化の中で研究されてきた先人達の物語。</p> <p>主として「川・河岸段丘・山のめぐみ」と食に関わる「雪国の暮らし（衣食住）」、「生業の歴史（編作）」に関係する物語であり、エピソードは、その年の豊作を願う行事を語る「豊穣の祈り（冬から春の行事）」と、収穫への感謝の祭りを語る「収穫の祭り（夏から秋の行事）」、豪雪地ならではの独特な祭りや風習を語る「雪国の遊び」の3つがあげられる。</p> <p>主として「川・河岸段丘・山のめぐみ」と「先人達の営みの歴史」、「雪国の暮らし」に関係する物語であり、エピソードは、十日町市の先人達の営みの歴史の物証となる遺跡等が数多く残る縄文時代と中世を中心とする「雪と共に生息した縄文人」「地形を活用した中世武士の戦いと祈り」と、先人達の知恵や工夫の3つがあげられる。</p> <p>主として「雪国（くらし）」、「生業の歴史（織物）」に関係する物語であり、エピソードは、女性の冬仕事 機織りと織物業」と、語る「女の冬仕事 機織りと織物業」と、男性の冬仕事で作られた伝統的な生活用品を語る「男の冬のワラ仕事」の2つがあげられる。</p> <p>●山や川のめぐみを生かした郷土料理 ●山と河岸段丘の編作</p>

(3) 関連文化財群の概要

関連する主な構成要素凡例：[国]国指定・登録文化財、[県]県指定文化財、[市]市指定文化財、[市地域]市指定地域文化財

物語	雪国に住み継ぐ人々 ～実は豊かだった豪雪地～
概要	<p>「雪地獄 父祖の地なれば 住み継げり」。昭和13年(1938)1月、十日町の劇場「旬街座」の屋根が雪の重みで落下した。69名の犠牲者の靈を弔うために建てられた深雪観音堂に掲げられたのが、阿部諒村によって詠まれた冒頭の句である。この句の「雪地獄」に例えられるように、豪雪地での生活は人々にとって厳しいものであった。しかし一方で、先人達は「豪雪」とともに生きる方法を身につけ、「豪雪」が与えてくれる様々なめぐみを受けながらこの地に住み続けて、歴史を積み重ね、文化を培ってきた。</p> <p>豪雪の中での人々の生活は縄文時代から始まっている。河岸段丘上の縄文時代の集落跡、山頂の要害城跡や平場の居館跡等の中世の遺跡などから、豪雪地という過酷な環境の中でも自然と共に共生する先人達の知恵や工夫をうかがい知ることができる。生活のあり方は時代とともに大きく変化しながらも、それらの知恵や工夫は、今に伝わる文化財や、現代の生活、建物様式に見ることができる。</p> <p>●雪と共生した縄文人</p> <p>十日町市は、信濃川と清津川の合流点付近（中里地域）にある「中林遺跡」「田沢遺跡」「壬遺跡」などの縄文時代草創期（約1万6000年前～1万1000年前）の遺跡を始め、国宝・火焰型土器が出土した「笹山遺跡」（十日町地域・縄文時代中期）など、1万5000年以上続く縄文時代の全ての時期の遺跡が数多く立地することで全国的に有名な地域である。</p> <p>河岸段丘上にある遺跡の出土品からは、縄文時代の人々のくらしづくりをうかがい知ることができる。山や川のめぐみを受け、春の山菜、夏の川魚、秋のサケや木の実、冬のウサギなど、四季折々の多種多様な食材を土器で煮炊きするなどし、豊かな食生活を送っていた。同時に人々は、豪雪地の長く厳しい冬に備え、食物を保存加工して貯蔵する知恵と技術を編み出した。食料事情の安定は定住につながり、集落内の老人たちによって知識や文化の継承が行われたと考えられる。</p> <p>自然と共生していた縄文人にとって、自然は信仰の対象でもあった。「笹山遺跡」や「野首遺跡」などから出土した「火焰型土器」は、その特殊な形状と立体的な文様、出土量の少なさから、祭祀用の煮炊きの器とも考えられている。縄文時代に豪雪地に住んだ人々の心のありようを探る手がかりであるとともに、その造形の美しさや力強さは現代の人々の心も魅了している。</p> <p>●地形を活用した中世武士の戦いと祈り</p> <p>鎌倉時代から南北朝時代は、大井田氏・中条氏などの新田氏一族が上野国からこの地方に進出し勢力をはった。大井田氏を中心とする越後新田氏一族は、元弘3年(1333)の新田義貞の倒幕挙兵に真っ先にはせ参じて以来、南朝のために働き、この地域は越後南朝の拠点となった。「大井田城跡」や「節黒城跡」、「坪野館跡」を始め、市内に残る約40か所の城跡や館跡の多くは、その当時のものと考えられている。</p> <p>室町時代は、関東管領上杉家の家領で、関東や信濃に接する国境地域であったことから、上杉氏にとって大変重要な地域であった。越後一国を統一し関東管領に就任した上杉謙信の時代、居城春日山（新潟県上越市）から十日町市内の松代～城之古～六箇を抜け塩沢に出て三国街道に至る経路は、関東へ抜ける軍用道路として重要視された。「室野城跡」「松代城跡」「犬伏城跡」「琵琶懸城跡」「羽川城跡」などは、この街道の要所に築かれた城の跡である。</p> <p>「松茅神社」（松代地域）は、戦国時代には上杉謙信を始めとする戦国武将が祈願所として信奉し、室町・戦国時代の遺品も残されている。川西地域を中心に市内に残る「板碑」は中世の石造供養塔の一種で、その多くはこの南北朝時代に造られている。また、新田義貞の鎌倉倒幕の挙兵や上杉謙信の統治の頃に關係する伝説も多く残っている。これらの市域に残された中世の文化財からは、戦乱の世に生きたこの地域の武士の生活や信仰の様子をうかがい知ることができる。</p>
	 <p>写真 2-31 : 笹山遺跡【市指定史跡】</p>  <p>写真 2-32 : 長徳寺板碑【市指定有形文化財】</p>

概要	<p>●雪と闘う人々の知恵や工夫</p> <p>約半年もの間厚い雪に覆われるこの地域では、雪に埋もれた長く厳しい冬を凌ぐための様々な知恵と工夫が培われてきた。</p> <p>「十日町の積雪期用具」は、秋の冬支度から始まり、雪との闘い、雪の中での日常の暮らしや社会生活、春の消雪に至るまでの雪国の生活と心情を物語る3,868点の用具類である。</p> <p>天保13年(1842)に上棟された「星名家住宅」(川西地域)の主屋は、太い柱や桁、梁など、豪雪に耐えるための様々な工夫を見ることができる建造物である。また、「雁木(アーケードの前身)」、雪の保冷機能を利用した「星名家住宅雪穴」や「小谷長者原の雪による蚕卵冷蔵施設」、雪崩の危険を避けるための「雪中隧道」なども雪国特有の施設である。そのほか、家屋や樹木を雪から守るために「雪囲い」、新雪を踏んで道をつける「道踏み」、屋根雪を除く「雪堀り」など、冬の風習や道具に込められた先人達の知恵や工夫は現代の雪国の生活にも継承されている。</p>  <p>写真2-33：十日町の積雪期用具（一部）【国指定重要有形民俗文化財】</p>
関連する主な構成要素	
雪と共生した 縄文人	<p>集落跡関係：信濃川と清津川合流付近の縄文草創期遺跡群、 笹山遺跡[市]、野首遺跡 等</p> <p>出土品関係：久保寺南遺跡出土品[県]、新潟県 笹山遺跡出土深鉢形土器 57点[国]、 笹山遺跡出土品(国指定分を除く)[市]、幅上遺跡出土品[市]、千溝遺跡出土隆起線文土器[市]、中島遺跡出土の縄文土器 78点[市]、樽沢開田遺跡出土品 98点[市]、西之前遺跡出土品[市地域]、野首遺跡出土品[市] 等</p> <p>その他：越後アンギン及び関係資料[市]、伝統技術：越後アンギン製作技術[市地域] 等、伝承・昔話：「道心清水」(十日町地域) 等</p>
地形を活用した中世武士の戦いと祈り	<p>城跡・館跡・集落跡関係：山城跡：大井田城跡[県]、大峰城跡、陣ヶ轟城跡、峰の薬師城跡、新座城跡、赤城城跡、羽川城跡[市]、節黒城跡[市]、室島城跡、千手城跡、犬伏城跡[市]、蒲生城跡[市]、室野城跡[市]、松代城跡[市地域]、蓬平城跡[市地域] 等、館跡：琵琶懸城跡、坪野館跡、尾崎館跡 等 集落跡： 笹山遺跡[市] 等、出土品：伊達八幡館跡出土品[県・市] 等、その他：上杉塚跡(管領塚)[市地域]、古道松之山街道(歴史の道百選)</p> <p>神社・寺院関係：松茅神社本殿[国]、板絵(犬伏松茅神社)[市]、木造狛犬(犬伏松茅神社)[市]、木造狛犬(黒倉十二社)[市地域]、四日町神宮寺境内地及び山林[市]、神宮寺観音堂・山門[県]、雲板(東光寺)[市]、雲板(洞泉寺)[市]、一遍上人絵詞伝(来迎寺)[市]、木造狛犬(天水越松茅神社)[市地域]、短刀・軍配(犬伏松茅神社)[市]、神輿(犬伏)[市]、高麗神社 等</p> <p>仏像関係：木造十一面千手観音立像(神宮寺)[県]、木造四天王立像(伝広目天・伝毘沙門天)(神宮寺)[県]、木造阿弥陀如来立像(来迎寺)[市]、木造聖観音立像(新宮)[市]、木造馬頭観音坐像(犬伏白馬観音堂)[市]、銅造阿弥陀如来立像(蒲生)[市]、木造聖観音坐像(海老)[市]、銅造十三仏像(長命寺)[市]、木造不動明王立像(洞泉寺)[市地域]、鉄造聖観音立像(陽広寺)[市]、木造延命地蔵菩薩立像(観音寺)、銅造地蔵菩薩立像(天水越不動堂)[市]、木造聖観音立像(中尾観音堂)[市]、木造十王像(正法寺)[市地域] 等</p> <p>石造物関係：板碑：川西地区の板碑 32基[市]、松代桐山の板碑 2基[市]、大黒沢正平在銘梵字碑[市] 等、石造物：室野阿弥陀堂跡の五輪塔・宝篋印塔(南北朝様式) 等</p> <p>伝承・昔話：「金剛童子と無名樹」(十日町地域)、「観音塚」(十日町地域)、「城之古観音」(十日町地域)、「竜王さまの由来」(十日町地域)、「ミソカそばと朝年取り」(川西地域)、「龍馬」(川西地域)、「靈鷲の湯」(松之山地域) 等</p> <p>その他：記念碑：清風萬里大井田城の碑、大井田氏発祥の地の碑、関連団体：全国大井田同族会 等</p>
雪と闘う人々の知恵や工夫	<p>建造物関係：建造物：星名家住宅[国]、旧室岡家住宅[市]、旧村山家主屋・表門[市]、智泉寺山門[市]、観泉院山門[市]、千手観音堂仁王門[市]、西永寺[国登録]、第二藤巻医院[国登録]、凌雲閣松之山ホテル本館[国登録] 等、集落(景観)：小白倉集落(美しい日本のむら景観コンテスト農林水産大臣賞受賞) 等</p> <p>施設関係：星名家住宅雪穴[国登録]、小谷長者原の雪による蚕卵冷蔵施設、雪中隧道(西田尻・犬伏)、雁木(アーケード) 等</p> <p>道具関係：十日町の積雪期用具[国] 等</p> <p>風習関係：降雪の予想(カマキリの巣の高さ、ナンテンの実のなり方など)、道踏み、雪堀り、橇による運搬、茅刈り、雪囲い、杉葉拾い、アキギリ・春木山(薪伐り)、オサバシ、ワラ・竹製品の雪晒し、農耕と自然暦(雪形)、山菜・キノコの加工貯蔵、漬け菜・コーコの漬け込み、納豆寝せ、兎狩り・山鳥狩り・熊狩り 等</p>

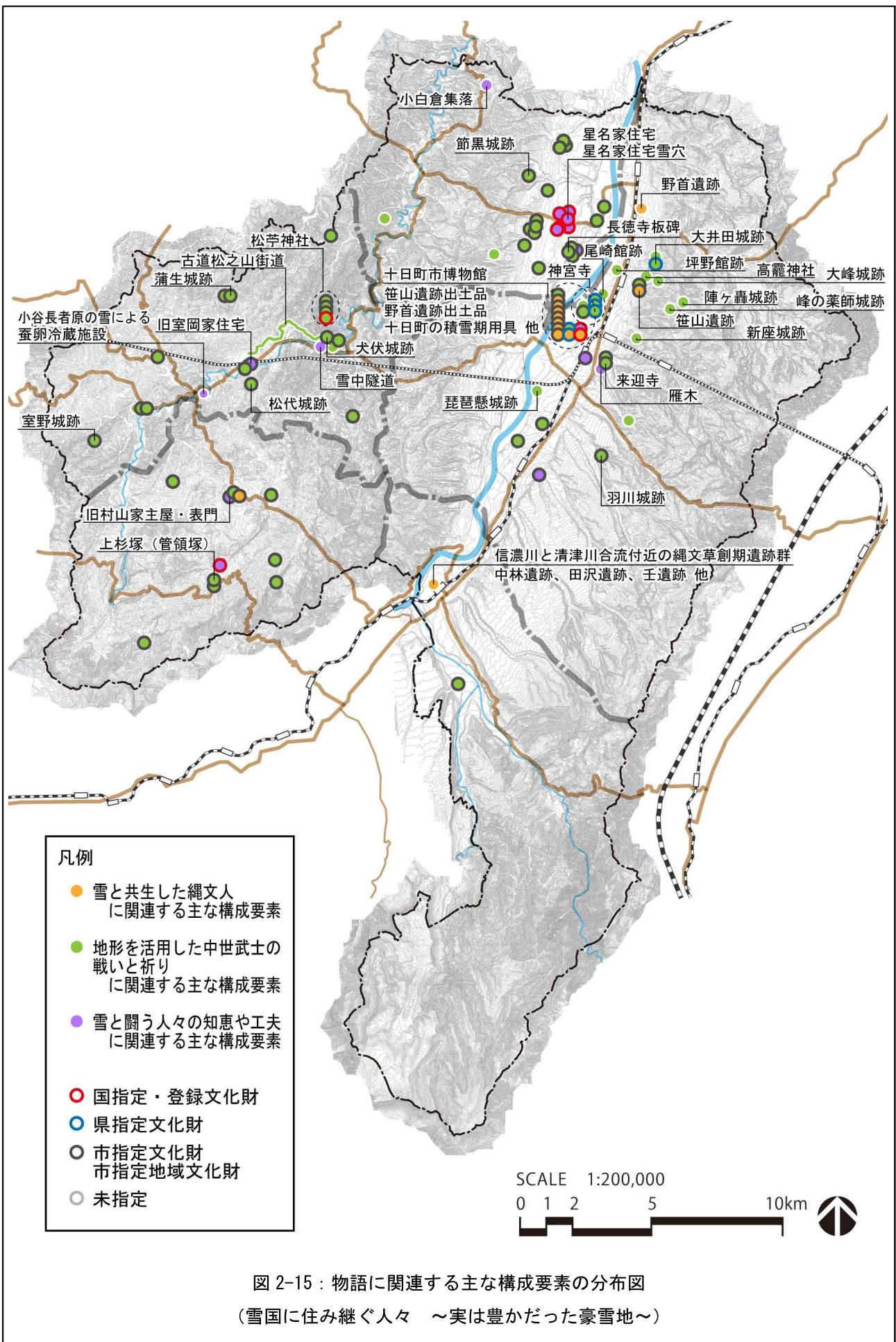


図 2-15：物語に関連する主な構成要素の分布図

(雪国に住み継ぐ人々 ~実は豊かだった豪雪地~)

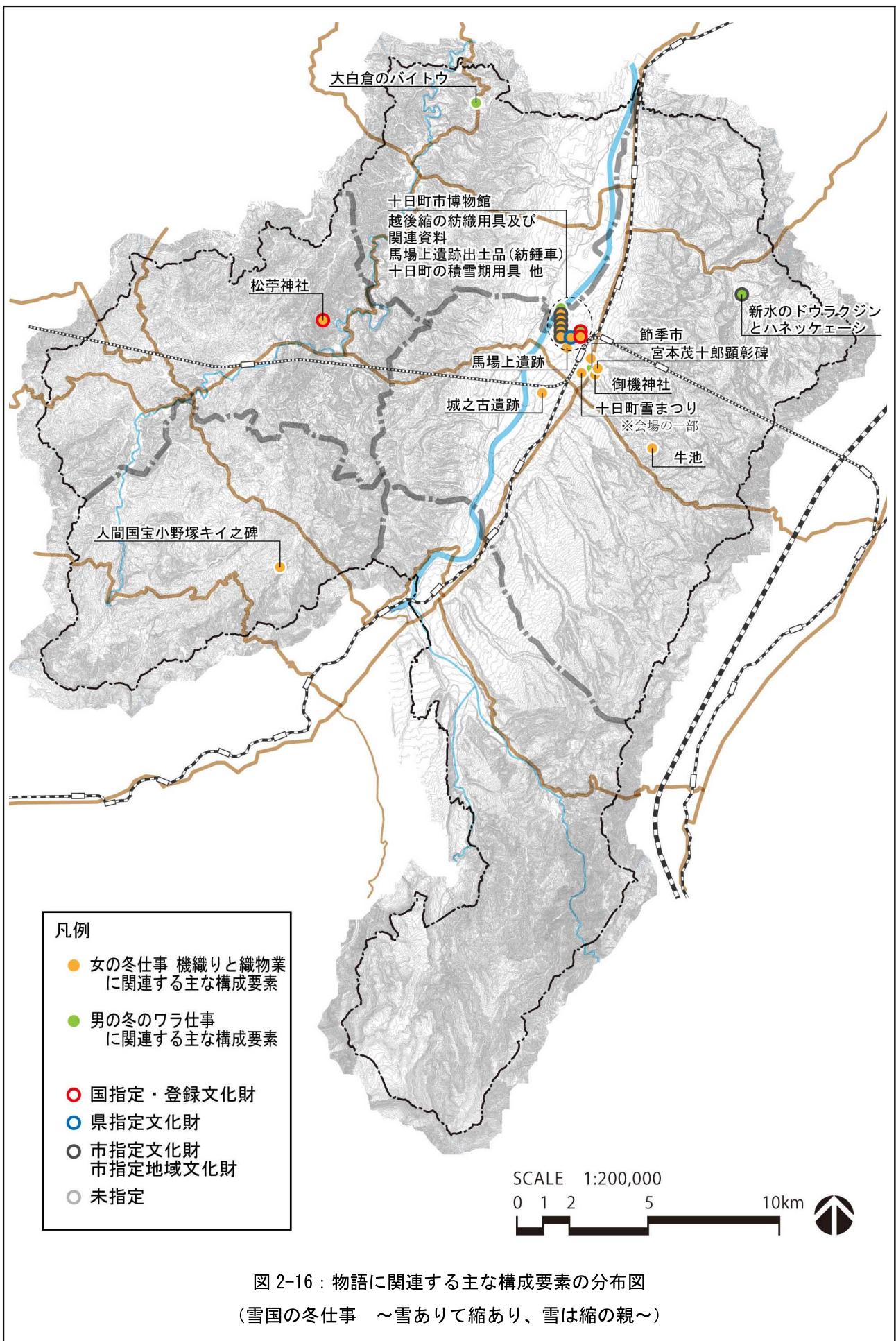
物語	<h2>雪国の冬仕事～雪ありて縮あり、雪は縮の親～</h2>
概要	<p>雪国の積雪期、家の中の「冬仕事」で代表的なものは、女の機織りと男のワラ仕事であった。鈴木牧之が著した江戸のベストセラー『北越雪譜』に「雪中に糸となし、雪中に織り、雪水に洒ぎ、雪上に晒す。雪ありて縮あり。されば越後縮は雪と人と氣力相半ばして名産の名あり。魚沼郡の雪は縮の親といふべし」とある。「越後縮」は、近世越後を代表する天下の名品として珍重され、雪国の女性たちがその発展を支えた。豪雪がもたらす気候風土と、雪に閉ざされる冬の生活の中で生まれた織物の歴史は、時代のニーズを反映しながら現在の十日町市の織物産業へとつながっている。ワラ仕事は、自給自足の生活を送る雪国の農家では大切な仕事で、出来上がったワラ細工や竹細工を売る「節季市」は現在も開かれている。</p> <p>●女の冬仕事 機織りと織物業</p> <p>この地域の織物の歴史は古く、「城之古遺跡」(弥生時代)や「馬場上遺跡」(古墳～奈良・平安時代)からは糸に撚りをかける紡錘車が出土し、当時から織物が織られていたことがわかっている。古代から中世まで越後の国で織られた麻織物は越後布、越布、白越などと呼ばれて品質を高めていった。江戸時代になると、緯糸に強い撚りをかけて織られた「越後縮」が誕生し、武家の式服に採用されて需要が高まった。豪雪地であるこの地の気候風土は縮生産に適しており、主産地の十日町に縮市場が開設され、取引の中心地として栄えた。機織りの上達を願い、越後縮の一部分を神社に奉納した「越後縮幡」には、越後縮の生産を担った農家の女たちのひたむきな想いがこめられている。</p> <p>江戸時代の末、宮本茂十郎がこの地域に絹縮と高機を伝え、生産される織物は麻から絹に急速に移行した。明治に入ると織物業は工場制工業へ発展し、看板商品となった「明石ちぢみ」は全国に名をとどろかせた。第二次世界大戦が終わると、十日町の織物産業は十日町小絣、マジョリカお召、黒絵羽織など次々と新商品を開発し、織りと染めの総合産地体制が確立した。昭和25年(1950)に始まった「十日町雪まつり」は、織物産地のPRの場ともなっている。市内には、このような機織りと織物業の歴史に関わる資料等が数多く残されている。</p> <p>●男の冬のワラ仕事</p> <p>雪深い冬の間、ジロ(いりり)端では、農家の男たちが、スッポン・ワラグツ等の履物、ナワ等の農耕用具、ミやザルなどの竹細工の製作に精を出した。親から子へと伝えられたその技術は、「十日町の積雪期用具」等の文化財にもみることができる。</p> <p>ワラ細工や竹細工の製作者は年々減少しているものの今もその技術は継承され、「新水のドウラクジン」や「大白倉のバイトウ」等のワラが欠かせない行事も多い。</p>
関連する主な構成要素	
女の冬仕事 織物業 機織りと	<p>織物関係資料：馬場上遺跡出土品(紡錘車)[市]、越後縮の紡織用具及び関連資料[国]、越後縮幡[県]、越後縮裂見本帳[市]、宮本茂十郎手織の透綾(絹縮)裂地[市]、縮問屋加賀屋蕪木家資料[市]、十日町織物歴代標本帳[市]等</p> <p>遺跡：城之古遺跡、馬場上遺跡 等</p> <p>織物信仰関係：松苧神社本殿[国]、御機神社 等</p> <p>織物関係施設：越後縮の流通(街道)、郡立中魚沼染織学校 等</p> <p>伝統技術：越後縮、越後布・越布・白越、松野山布・松山布、越後上布、明石ちぢみ、意匠白生地、マジョリカお召</p> <p>行事・祭事：十日町雪まつり、十日町きものまつり 等</p> <p>伝承・昔話：「牛池」(十日町地域)、「池谷の異獣」(十日町地域)、「松苧山の女神」(松代地域) 等</p> <p>その他：民謡・唄：十日町小唄 等、記念碑：宮本茂十郎顕彰碑、人間国宝小野塙キイ之碑 等</p>
男の冬仕事	<p>ワラ細工・竹細工：十日町の積雪期用具[国]、川漁関係資料 等</p> <p>行事・祭事：新水のドウラクジンとハネッケージ[市]、大白倉のバイトウ、節季市 等</p>



写真2-34：越後縮の紡織用具及び関連資料(一部)【国指定重要有形民俗文化財】



写真2-35：十日町の積雪期用具(一部)【国指定重要有形民俗文化財】



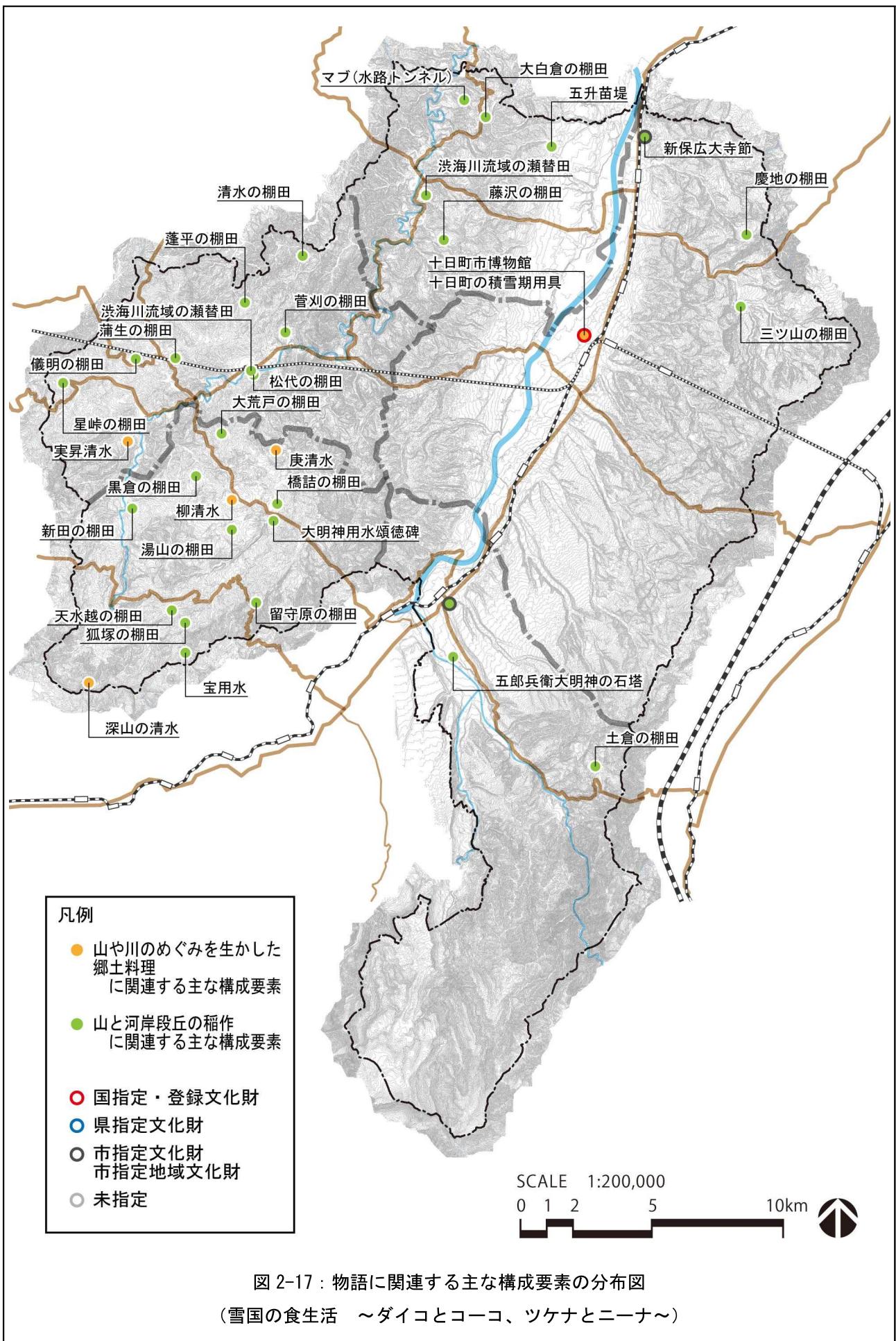
物語	<h2>雪国の食生活～ダイコとコーク、ツケナとニーナ～</h2>
概要	<p>初雪の降る頃の大切な冬支度に「ツケナ（漬け菜）洗い」がある。「ツケナ」は野沢菜漬けのこと、冬の間は副食やお茶請けとして食べ、春になる頃に酸味が増すとこれを煮込んで「ニーナ（煮菜）」にする。「ダイコ（大根）」は古くからの大切な野菜で、生食用には「ダイコダテ」で保存し、煮込んで「ダイコニ（大根煮）」、干して「コーク（沢庵漬）」にするなど、様々なに加工して利用した。これらの食文化は、長い冬を凌ぐための知恵や工夫が生んだ郷土の味として今も継承されている。</p> <p>また、近世以降、河岸段丘に開拓された水田や、棚田、マブや瀬替え等の工事を行って開いた山間地域の水田など、変化に富んだ地形を生かした稻作が行われた。十日町産の「魚沼コシヒカリ」は、日本のトップブランドに育っている。</p> <p>●山や川のめぐみを生かした郷土料理</p> <p>雪が消えると、人々は競って山菜採りに出かける。この地域の人々にとって、「キノメ」と呼ばれるミツバアケビの新芽や、ゼンマイ、ワラビ、コゴミなどの山菜は、春を迎える喜びとともに味わう特別なものである。山菜や木の実、鳥やウサギ、川魚など、旬の自然のめぐみを楽しみ、冬に備えて加工・保存する食生活は、縄文時代からこの地で行われてきたものと想像できる。</p> <p>豪雪地である十日町市では、長く厳しい冬の間の食料の備蓄と活用に心を用いてきた。その知恵と工夫が生んだ食文化が、郷土料理として各家庭の日々のくらしの中で引き継がれ、訪れる人も楽しませている。</p> <p>●山と河岸段丘の稻作</p> <p>十日町市の貴重な平場である河岸段丘には、江戸時代に用水がひかれて以降新田開発が進められ、信濃川によってはやくから開けた肥沃な台地に水田が広がっている。</p> <p>松代・松之山地域などの山間地域には、山間や谷間の斜面地に多くの棚田が造られている。また、山間の複雑な地形を流れる渋海川流域には、川の流れを変える「瀬替え」や山にトンネルを掘って川の流れを引き込む「マブ」等の農地開発により旧河道に確保された水田がみられる。</p> <p>このように、地形や気候を生かした稻作が行われ、現在十日町市で収穫されるコシヒカリは「十日町産魚沼コシヒカリ」と呼ばれて、全国的に人気のある米となっている。</p>
関連する主な構成要素	
み山 郷をや 土生川 料理 かの 理しめ たぐ	<p>資源：山菜・キノコ、川漁、狩猟 等</p> <p>湧水地関係：深山の清水、柳清水、庚清水、実昇清水（新潟県の名水に選定） 等</p> <p>郷土料理：ツケナ、ニーナ、ダイコニ、コーク、アンブ等</p> <p>道具関係：十日町の積雪期用具[国] 等</p>
山と 稻作 河岸段丘の	<p>耕作地：棚田：星峠、儀明、蒲生、松代、菅刈、蓬平、清水、大荒戸、黒倉、新田、橋詰、湯山、留守原、天水越、狐塚（日本の棚田百選）、土倉、大白倉、藤沢、三ツ山、慶地 等</p> <p>耕作関係施設：渋海川流域の瀬替え田、五升苗堤、大明神用水、大倉用水、宝用水、マブ（水路トンネル） 等</p> <p>耕作関係資料：桔梗原新田用水路絵図[市地域] 等</p> <p>その他：民謡・唄：新保広大寺節[市] 等、伝承・昔話：「城之古觀音」（十日町地域）、「鉢のコーコー平」（十日町地域） 等、記念碑：大明神用水頌徳碑、五郎兵衛大明神の石塔 等</p>



写真 2-36: 郷土料理(コークやツケナ)



写真 2-37 : 儀明の棚田



物語	<h2 style="text-align: center; font-size: 1.2em;">雪国のごったくとごつお ～めでたいものは大根種～</h2>
概要	<p>「ごったく」は行事、「ごつお」はご馳走を意味する十日町市の方言である。「めでたいものは大根種」は、この地方の祝い唄「天神ばやし」の歌詞で、古くから婚礼、祭り、集落行事等の人が集まるところで唄われてきた。</p> <p>稻作の盛んな十日町市では、稻の成長に合わせた四季折々の祭りが集落ごとに呼び名や風習を変えて行われてきた。小正月にはその年の豊作を願う行事が行われ、秋には収穫への感謝の祭りが行われる。それらは、生業などへの祈りであるとともに、人々の暮らしの中の楽しみでもあった。特に冬場には豪雪地ならではの独特な祭りや風習があり、現在も継承されている。</p> <p>●豊穣の祈り（冬から春の行事）</p> <p>冬から春にかけて、正月、小正月、春彼岸など、無病息災や、その年の豊作を願う様々な年中行事が行われる。小正月に行われる「新水のドウラクジン」「大白倉のバイトウ」では「天神ばやし」が唄われ、どちらも煙のなびき方や炎の上がり方で、その年の豊凶占いをする。そのほか、「婿投げ・スミぬり」など、雪国ならではの特徴ある行事が現在も行われている。</p> <p>●収穫の歓び（夏から秋の行事）</p> <p>秋になると、各地の神社で行われる豊穣への感謝の祭りを始め、雪国の短い夏から降雪前の冬支度が始まるまでの間には、人々がつかの間の休みを楽しむ様々な行事が行われる。</p> <p>諏訪神社の秋季大祭が発展した「十日町おおまつり」や、田を潤す渋海川で体を清めて神輿を担ぐ松原神社の「犬伏裸祭り」、豊作を祝う舞が奉納上演される十日町赤倉の鎮守十二社の祭礼「赤倉神楽」などの様々な祭事が市内各所で開催される。</p> <p>●雪国の遊び</p> <p>子供たちは、雪晴れの日には雪だるまづくり・ママゴト・竹スキー・ソリ・ガチ（雪玉同士をぶつけあい硬さを競う遊び）等、雪を使って遊んだ。この雪を楽しむというところは、「雪を敵とせず、友としよう」と始まった「十日町雪まつり」や「雪原カーニバルなかさと」「越後まつだい冬の陣」など、市外から多くの人々が訪れる現代の各地の冬のイベントに引き継がれている。</p>
	
	<p>写真 2-38 : 大白倉のバイトウ</p>
	
	<p>写真 2-39: 雪原のソリあそび(昭和32年)</p>
関連する主な構成要素	
か 豊 ら 春 の 行 事 （ 冬 ）	<p>風習関係：慰労（アキゴト・流しごと、コト納め）、大師講、正月の準備（煤はき・松迎え、餅搗き）、大正月（年取り、若水汲み、年始回り、仕事始め、釜神様の年取り、七日正月、十一日正月）、小正月（鳥追い、モグラモチ追い、成り木責め）、節分、初午、コト始め、十二講、団子撒き、春彼岸の雪墓・ホツケタチ 等</p> <p>行事・祭事：新水のドウラクジンとハネッケエーシ[市]、婿投げ[市]、スミぬり[市]、大白倉のバイトウ、節季市 等</p> <p>行事食：納豆、ヒラ、モチ、豆腐、ソバ 等</p> <p>民謡・唄：祝い唄（天神ばやし）等</p>
か 収 ら 秋 の 行 事 （ 夏 ）	<p>風習関係：七ツ詣り、ショウブギリ、ロクロイイン、黒姫参り、馬とばせ、風祭り</p> <p>神社・寺院関係：諏訪神社、松原神社本殿[国]、赤倉の十二社、千手觀音、松代の十王堂（馬頭觀世音菩薩）等</p> <p>行事・祭事：十日町おおまつり、犬伏裸祭り、赤倉神楽[市]、室野神楽[市]、芋島神楽[市]、田代神楽[市]、野口神楽[市]、千手觀音十七夜まつり、松代觀音祭 等</p> <p>行事食：棒鱈、ソバ等</p>
雪 遊び の 国 の	<p>風習関係：子供の夜遊び、シミワタリ、スキー、山遊び 等</p> <p>行事・祭事：十日町雪まつり 等</p>

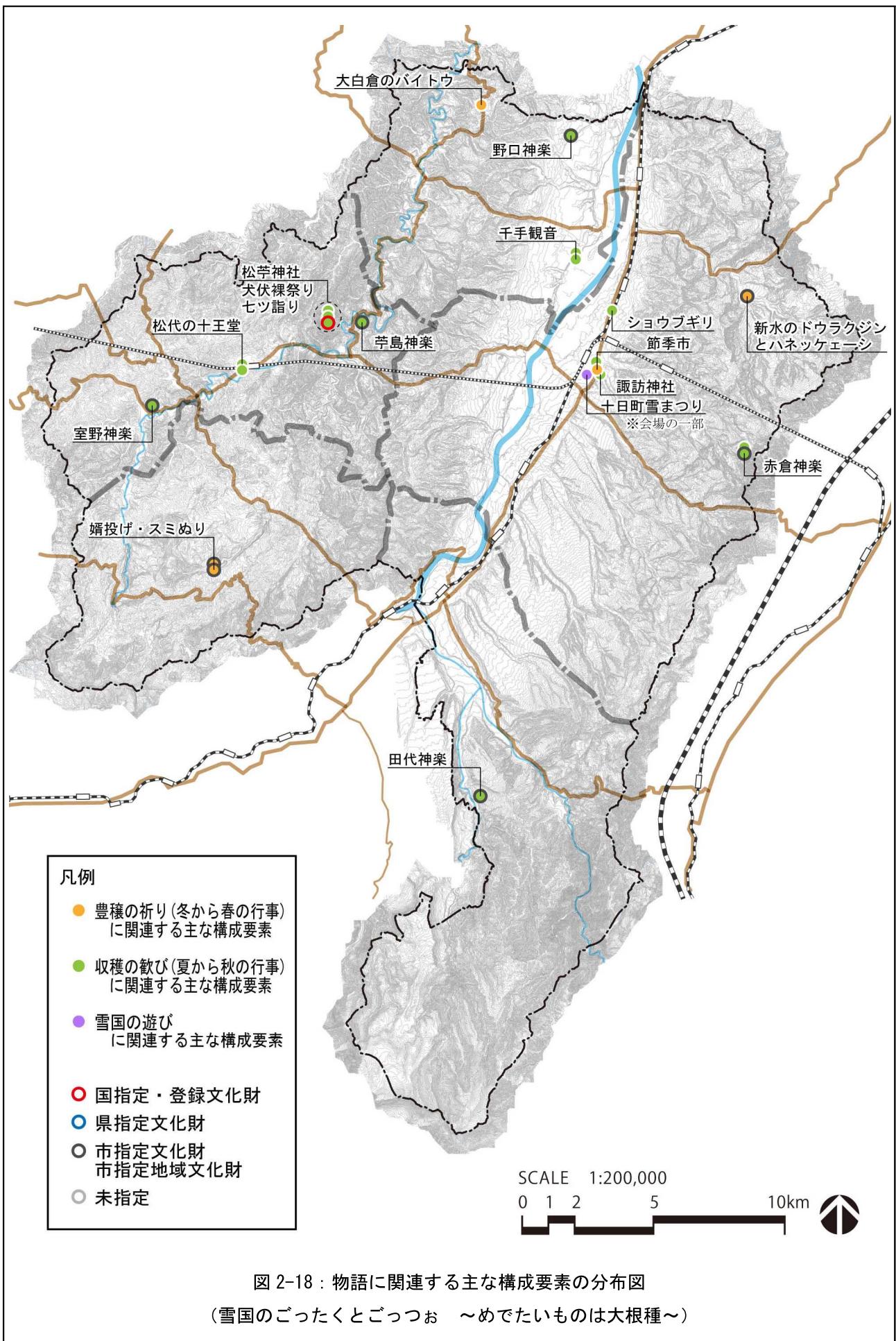
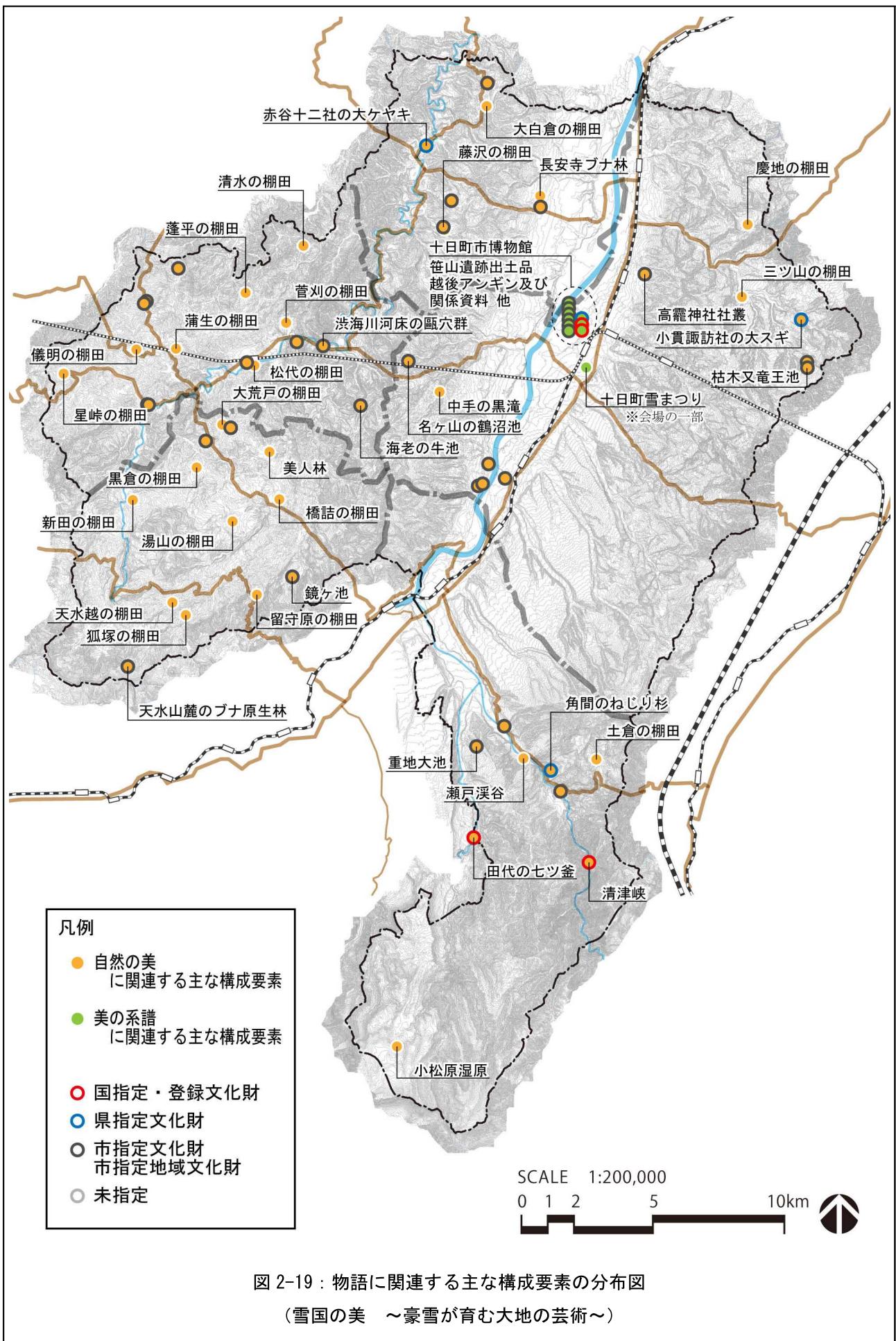


図 2-18：物語に関連する主な構成要素の分布図
(雪国のごったくとごつとお ~めでたいものは大根種~)

物語	雪国の美～豪雪が育む大地の芸術～	
概要	<p>十日町市の豊かで変化に富んだ自然は峡谷等の美しい自然景観をもたらし、そこでの人々の営みは棚田等の美しい文化的景観を形成している。また、火焰型土器や、古い織物の歴史の中で生み出されてきた着物などには、豪雪地の生活の中で研ぎ澄まされてきた先人達の美への感覚が表れている。そして、美しい里山は、現代美術の国際芸術祭「大地の芸術祭」の舞台となっている。</p> <p>●自然の美</p> <p>十日町市の豊かな自然は、春の新緑、夏の深緑、秋の紅葉、冬の雪景色と四季折々に趣を変え、美しい風景となる。中里地域の「清津峡」「田代の七ツ釜」には峡谷や渓流が生み出す絶景を見るために多くの人々が訪れる。</p> <p>自然と共生する人々の営みによって形成された文化的景観も、この地域特有の美しい風景である。「にほんの里百選」に認定された松之山・松代地域などに広がる「棚田」や、松之山地域の「美人林」を始めとするブナ林の風景は、豪雪地での先人達のくらしの歴史を物語るとともに、その美しさが多くの人々の心をひきつけている。</p> <p>●美の系譜</p> <p>十日町市の美の系譜は、縄文時代に始まる。大仰な4つの突起を持つ火焰型土器を見て、そこに美を発見した芸術家・岡本太郎は「なんだ、コレは！」と驚愕した。縄文時代にまでさかのぼる布・技術といわれる「アンギン（編布）」は、十日町市とその周辺にのみ製作用具や技術が残されている。雪国の風土を生かし、時代のニーズに合わせて発展した機織りや織物業の歴史は、麻から絹へ、織物から染め物へと広がり、洗練され、研ぎ澄まされて美しい着物を生み出してきた美の歴史でもある。</p> <p>雪に閉ざされた長い冬の白一色の世界から、色彩豊かな春、夏、秋へと劇的に移り変わる四季の中で、この地の人々の美への感覚は育まれてきた。</p> <p>先人達から引き継がれた美意識は、昭和25年（1950）から始まった「十日町雪まつり」などで市民によって作られる雪像や雪のステージの造形にも生かされている。</p>	<p>写真 2-40 : 蒲生の棚田</p>
		<p>写真 2-41 : 火焰型土器【国宝】</p>
関連する主な構成要素		
自然の美	<p>河川景観：田代の七ツ釜[国](苗場山麓ジオパークのジオサイト)、清津峡[国](上信越高原国立公園)、瀬戸渓谷、中手の黒滝[市]、渋海川河床の甌穴群[市] 等</p> <p>樹林景観：天水山麓のブナ原生林[市]、美人林、長安寺ブナ林(新潟県緑地環境保全地域)、高龕神社社叢[市]、小松原湿原(上信越高原国立公園、苗場山麓ジオパークのジオサイト)、新潟県自然環境保全地域) 等</p> <p>樹木関係：赤谷十二社の大ケヤキ、小貫諏訪社の大スギ、角間のねじり杉(以上3件[県])、元町諏訪神社の親子スギ、松代田沢十二社の大ケヤキ、松代田沢十二社の大イチヨウ、長命寺の大イチヨウ、寺田の大力エデ、姿箭放神社の大ケヤキ、洞泉寺の大ケヤキ、室野松茅神社の大スギ、小谷の大ケヤキ、大荒戸の庚申夫婦スギ、安養寺松尾神社の大スギ、安養寺円通庵の三本スギ、枯木又竜王社の三本スギ、藤沢熊野神社の二本スギ、田戸十二社の二本スギ、白倉のカスミザクラ、程島下の行者の大ケヤキ、葎沢十二社の大スギ、太田島小牧社の大ケヤキ(以上19件[市])、枯木又のカスミザ克拉、勘平のお葉付イチヨウ、寺田の白フジ(以上3件[市地域]) 等</p> <p>湖沼関係：海老の牛池[市]、枯木又竜王池[市]、重地大池[市]、名ヶ山の鶴沼池[市]、鏡ヶ池[市地域] 等</p> <p>耕作地景観：棚田：星峠、儀明、蒲生、松代、菅刈、蓬平、清水、大荒戸、黒倉、新田、橋詰、湯山、留守原、天越、狐塚(日本の棚田百選)、土倉、大白倉、藤沢、三ツ山、慶地 等</p>	
美の系譜	<p>出土品：火焰型土器 等</p> <p>織物関連：越後アンギン及び関係資料[市]、越後アンギン製作技術[市地域]、馬場上遺跡出土品(紡錘車)[市]、越後縮の紡織用具及び関連資料[国]、越後縮幡[県]、越後縮裂見本帳[市]、宮本茂十郎手織の透綾(絹縮)裂地[市]、縮問屋加賀屋糸木家資料[市]、十日町織物歴代標本帳[市]、明石ちぢみ、意匠白生地、マジョリカお召行事・祭事：十日町雪まつり 等</p>	



第3章 十日町市の文化財等の保存・活用

1. 文化財等の保存・活用の現状と課題

(1) 保存に関する現状と課題

① 現状

ア. 独自の指定制度による文化財等の保存の取組

平成 17 年(2005)4 月に合併した十日町、川西、中里、松代、松之山の 5 つの地域は、古くから多様な文化を育み、それらの地域固有の文化が現在まで受け継がれ、歴史や文化の物証となる文化財等が残されている。

十日町市では、それらの市内にある文化財等のうち国・県指定以外の文化財の保存を図るため、合併に合わせて十日町市文化財保護条例を制定し、平成 19 年(2007)度から合併による指定文化財の見直し作業を行い、市の歴史や文化を語る上で欠かすことのできない貴重な文化財を、市指定文化財に指定している。本条例では、市指定文化財以外の文化財のうち、その文化財の価値にかんがみ、保存及び活用のための措置が特に必要とされるものについて、十日町市独自に「十日町市指定地域文化財」に指定し、より多くの文化財の保存及び活用のための措置が図れるようにしている。

イ. 豪雪、洪水、土砂災害等の自然災害に対する取組

国内有数の豪雪地帯であり、多くの中山間地域を抱える十日町市では、豪雪、洪水、土砂災害等の自然災害が発生しやすい環境の中で文化財を確実に保存していくために、屋外管理の文化財を対象に積雪期の雪廻い・除雪等に必要な経費の一部を助成するなど、市独自の制度を取り入れながら、文化財の維持管理及び修理等の事業に要する経費に対する助成事業を行ってきた。また、新潟県中越大震災や豪雪・豪雨災害等による文化財の被害に対しては復旧事業を実施してきた。そのほか、文化財防火デーにあわせて防災訓練を行うなど、文化財の所有者や市民の防災意識向上に努めている。

ウ. 数多い遺跡の調査や寄贈・寄託資料の整理

市内で多くの遺跡が確認されている十日町市では、開発行為に伴う発掘調査を実施して遺構を把握するとともに記録や保存を進めている。

市の歴史、民俗及び考古に関する資料を収蔵するため、十日町市文化財資料収蔵庫条例を制定し、発掘調査等の調査で得られた遺物や、市民の寄贈・寄託により集まった地域歴史資料等を収蔵して保存管理している。また、増加する資料等の保管場所を確保するため、収蔵庫の増設を図り、適切な保存管理に努めている。

調査や地域歴史資料の整理については、市民の協力により進められているものもあり、笹山遺跡ボランティアが出土品整理・分析の補助や展示解説を実施しているほか、十日町市古文書整理ボランティアによる寄贈・寄託資料の整理などが行われている。

② 課題

ア. 文化財等の保存策の充実

(ア) 未指定文化財の保存

合併後に拡大した市域には多くの文化財等が所在するが、文化財指定されていないものも多く、それらの確実な保存や継承に向けた保存を進めていく必要がある。

(イ) 民俗芸能・風俗慣習の後継者の育成

神楽などの民俗芸能や、年中行事などの風俗慣習については、若年人口の減少による後継者や協力者の不足によって伝承活動に苦慮している団体が多く、後継者の育成と協力者の確保が急務である。

(ウ) 自然災害への対応

豪雪・豪雨等の自然災害によって、文化財等やその周辺に対して影響を及ぼす事例も増加しつつあるため、未然の防止策や被災後の早急な対応を検討していく必要がある。

(エ) 歴史資料の収集・整理と保存管理

生活様式の変化や、土蔵・古民家の解体などによって失われつつある地域の歴史資料を、収集する必要がある。また、合併前の旧市町村時代の収集資料や、新たな発掘調査による出土遺物、市民からの寄贈・寄託資料等を整理し、適切に保存管理を行っていく必要がある。

(オ) 文化財所有者の負担軽減

文化財の所有者や継承者には、保存と継承のための大きな負担が生じるため、保存に関わるボランティアの育成や補助金の活用・運用等により、所有者等の財政面や労力面での負担を軽減していく必要がある。

イ. 文化財等の調査・研究の充実

(ア) 調査による情報収集と情報の蓄積

文化財の新指定や未指定の文化財等の把握のために調査や情報の収集・蓄積が必要である。特に、民俗に関するものは、生活様式の変化により失われていくものが多く、早急な調査が求められる。

(イ) 調査・研究体制の構築

考古分野においては、発掘調査の成果を報告書の刊行に効率的に繋げるため、人員体制の充実と人材育成が必要である。また、歴史、民俗、美術、自然などの分野においても、人員体制を整えるなど、調査研究を行う体制を構築する必要がある。

ウ. 文化財等の整備や修復

(ア) 文化財等の保存整備の実施

史跡等については、遺構の適切な保存に必要な措置を図るとともに、その活用に向けた整備事業を進めていく必要がある。建造物については、経年劣化に伴い一定周期での保存修理が必要となるため、各建造物の状況を把握し、計画的に実施していく必要がある。

(イ) 技術者と資材の確保

文化財等の保存修理には特別な技術が求められ、特定の資材も必要となるが、技術者が減少していること、資材の確保が困難になっていることが課題となっている。

(2) 活用に関する現状と課題

① 現状

ア. 国宝 火焰型土器の活用

十日町市では、日本最古の国宝・火焰型土器を所有する市として、日本文化の源流である縄文文化を国内外に広く発信する事業に取り組んでいる。火焰型土器の2020年東京オリンピック・パラリンピック聖火台モチーフへの採用に向けた運動や、縄文時代の国宝を所有している自治体との連携などのほか、2016年リオデジャネイロオリンピック・パラリンピックでは「ジャパンハウス」の文化庁エリアに国宝・火焰型土器のレプリカを展示し、オリンピック終了後、ジャパンハウスが設置された複合文化施設シダージ・ダス・アルテスにレプリカを寄贈した。また、3Dスキャナを用いた3次元計測及びX線CT計測を東京国立博物館と共同で実施し、そのデータを学術的分野で活用していくこととしている。

国宝の火焰型土器が出土した笹山遺跡を中心とした地域を「火焰の都」として、遺跡の保存と、交流・体験の場の創出を図るための事業を進めている。笹山遺跡では、既に整備されている笹山遺跡広場や笹山縄文館を活用する事業として、「笹山じょうもん市」(十日町市は共催)の開催や「笹山縄文カレッジ」などの各種体験イベントを、NPO法人や市民団体、ボランティアの協力を得て実施している。

イ. 博物館・資料館を中心とした普及啓発活動

十日町市では、十日町市博物館、越後松之山「森の学校」キヨロロ、十日町市まつだい郷土資料館、十日町市松之山郷民俗資料館の4つの博物館・資料館により、地域の歴史文化に関する情報提供や普及啓発活動を行っている。

十日町市博物館では、地域の歴史資料の収集や保管、展示とともに、博物館講座、古文書入門講座、子ども博物館等の歴史や文化について学ぶ事業を実施し、市民に文化財に関心をもってもらうよう取り組んでいる。また、学校教育における博物館活用の促進のため、授業で訪れた児童・生徒への展示説明や、学校への出前授業、職場体験の受け入れのほか、「博学連携プロジェクト」と共催して、信濃川流域の小学生が縄文文化について学ぶ活動を実施している。なお、十日町市博物館については、「国宝・火焰型土器のふるさと—雪と織物と信濃川—」を展示テーマとした新博物館を平成32年(2020)に開館予定である。2020年東京オリンピック・パラリンピックを契機に、国宝・火焰型土器や地域文化を世界に向けて発信するための新しい拠点施設として整備が進められている。

自然科学館である越後松之山「森の学校」キヨロロでは、地域の自然や文化などを主たる題材として、これらに関する調査研究をベースとした企画展の開催や自然文化体験イベント(里山自然観察、市民協働調査、ものづくり体験、里山文化体験)や、各種講演会を実施している。博物館活動への積極的な市民参加を促し、市民が里山の自然や文化を調べた成果を発信する場として「つまり市民里山学会」を開催し、市内小中学校の理科や総合的な学習の時間などへの教育支援を行い、その成果を発信する場として「こども里山学会」や、「私たちの地域自慢 学習成果発表ブース展」を開催している。さらに越後田舎体験など様々な教育旅行、里山の自然・文化体験ツアーを受け入れ、里山の自然や文化の発信を行っている。

ウ. 文化財等に触れる機会の創出に向けた近年の取組

文化財の周知・活用と地域振興を目指し、コレクションカード「文化遺産カード」を平成 23 年(2011)度から発行し、現在 15 種類を配布している。

市域を越えた広域的な連携も進めており、「信濃川火焔街道連携協議会（新潟市、三条市、長岡市、魚沼市、十日町市、津南町の 5 市 1 町）」は、火焔型土器に代表される縄文をキーワードに、信濃川流域の市町村との交流・連携により地域振興及び広域観光を推進することを目的としている。各市町村の遺跡や展示施設を拠点にしたハード・ソフト両面での有機的な連携により、地域内外へ積極的に情報発信している。また、十日町市博物館は、「南魚沼市トミオカホワイト美術館」「鈴木牧之記念館」（ともに南魚沼市）と雪の文化を通じて姉妹館提携している。

エ. 古民家活用への取組

古民家が点在している十日町市では、市内に存在する空き家等の有効活用を通して、移住、定住の推進及び活性化を図ることを目的として、市のホームページを活用した「空き家バンク」制度を運用している。

また、古民家をシェアハウスとして活用している事例や、松代地区の「街並み景観」を再生して地域の活性化に結び付けようとする取組の中での古民家再生の事例がある。

② 課題

ア. 文化財等に触れる機会の創出に向けた普及啓発

(ア) 博物館・資料館の積極的な活用

文化財等の保存・活用の拠点となる博物館や資料館の積極的な活用が求められる。

特に、平成 32 年開館予定の新十日町市博物館については、新たな展示や活動と、市域に分布する文化財等との連携を図った活用が求められる。

(イ) 学校教育・生涯学習の充実

市民に文化財等への関心をもってもらい、地域文化に誇りをもってもらうため、歴史文化に関する講座等の取組をさらに充実させていくことが望まれる。

(ウ) 文化財等の情報提供の充実

市民や国内外からの来訪者など、より多くの人々に十日町市の歴史文化を伝えて、魅力を感じてもらうために、文化財等の情報提供を充実させていく必要がある。

(エ) 文化財等の公開

市内に所在する文化財等には、個人所有等により一般に公開されていないものも多いため、積極的な公開により文化財等に触れる機会を創出していくことが望まれる。

(3) 保存・活用体制の現状と課題

① 現状

ア. 文化財課を中心とした行政の保存・活用体制

十日町市の文化財行政については、これまで十日町市教育委員会事務局文化スポーツ部文化財課及び十日町市博物館の職員を中心に、庁内の関係部局や文化庁、新潟県教育庁などの関係機関と連携して進めてきた。文化財課では、文化財の調査や指定・登録、指定文化財等の直接的な保存整備や所有者等が行う保存整備への支援、文化財の公開や普及啓発活動を実施している。

また、十日町市文化財保護条例に基づき、各分野の学識経験者の委員で構成される文化財保護審議会を設置し、教育委員会の諮問に応じて文化財の保存及び活用に関する重要事項について調査審議している。

イ. 地域社会の中での文化財の維持管理や保存整備

文化財等の維持管理や保存整備については、所有者・管理者が主体的に実施しているが、少子高齢化や過疎化など、次代の保存・活用を担う後継者の確保に苦慮している現状がある。そのため、積雪期の雪囲い・除雪を始め、清掃や草刈り等の維持管理活動において、地域住民等による支援が行われている。

また、^{しゃんぱこうだいじょし}新保広大寺節等の民俗芸能などを中心に、地域住民により保存会が結成され、文化財の保存や継承活動に積極的に取り組んでいる例もある。

ウ. 調査・研究への市民参加

市内の埋蔵文化財の調査・研究は、文化財課埋蔵文化財係が実施しているが、その他、歴史や文化に関する調査や研究については、市民が実施または参加しているものもある。

十日町市博物館開館に先立って昭和 54 年(1979)に発足した「十日町市博物館友の会」では、現在、植物・古文書・いしづみ・歴史・方言・考古・近代史・着物・民俗の 9 つの研究グループが独自の研究活動を行い、成果を発表している。また、新潟県中越大震災を契機に平成 17 年(2005)に発足した「十日町市古文書整理ボランティア」は、新潟県中越大震災や長野県北部地震などで被災した古文書や古写真等の歴史資料を保存整理するとともに、歴史資料の研究を行っている。その活動は高く評価され、平成 25 年(2013)に新潟県自治活動賞（地域づくり部門）を受賞している。

エ. 市民のボランティア活動や企業等の参加

平成 12 年(2000)から始まった「大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ」には、ツアーガイドや運営に関する活動などを手伝うサポーターとして多くの市民が参加するなど、市民のボランティアに対する参加意識は高く、歴史や文化に関わる行事やイベント等についても、地域住民や民間団体が積極的に関わって実施されているものがある。

十日町市では、平成 17 年(2005)から十日町市生涯学習人材バンクを設置し、市民の経験、知識、技術を生かし、生涯学習や学校教育等における講師や技術指導を行う人材の登録制度を展開している。

また、(一社)十日町市観光協会による観光ガイドや地域住民による清津峡ガイドボランティア(なかさと清津案内人)、笛山遺跡ボランティア等の歴史や文化に関わるボランティア活動も行われている。

その他、平成 28 年度から 3 カ年計画で十日町商工会議所が中心となって実施している「火焔型土器のクニ 十日町 繩文ツーリズムプロジェクト」では、行政、観光協会・地場産業振興センターなどの関係団体、N P O 法人、企業などが参画し、縄文文化・食などの地域資源を活用した観光開発と特産品開発を目的とした事業を行っている。

② 課題

ア. 地域社会の中での文化財等の保存・活用に向けた関係者との連携

(ア) 関係者間の連携体制の強化

十日町市の歴史や文化を核とした地域振興を目指し、教育委員会だけでなく、観光交流課、産業政策課、企画政策課などの関係部署や、新潟県十日町地域振興局、関係団体、関連する自治体と連携しながら、普及活用事業や情報発信事業を展開していく必要がある。

(イ) 市民や市民団体、企業等との連携体制の強化

市民や地域との協働による文化財等の保存や活用に関する活動を充実させていくために、文化財等の維持管理や調査・研究、ガイド等に市民や市民団体、企業等が積極的に参加できるよう、現在の取組を強化していくことが望まれる。

(ウ) 地域のまちづくりと一体となった保存・活用の体制づくり

十日町市には、地域の特徴的な景観の要素を成す有形の文化財等や祭事等の無形の文化財等が数多く存在するが、その価値が十分に生かされていないものや、生活環境が変化していく中で失われていく可能性があるものがあるため、地域のまちづくりの中で活用しつつ、保存する体制づくりが求められる。

2. 文化財等の保存・活用の方針

(1) 文化財等の保存・活用の目標と基本方針

保存・活用や体制の現状と課題を踏まえて、十日町市における文化財等の保存・活用の目標と基本方針及び基本方針を実現していくための方策を以下のように設定する。

<保存・活用の目標>

豪雪とともに生きてきた人々の知恵が育んだ歴史文化の証となる文化財等を「地域の財(たから)」として、人々のくらしの中で保存・活用して、後世に継承していく。

<保存・活用の基本方針>

- 「地域の財(たから)」の適切な保存により、後世に継承していく。
- 「地域の財(たから)」の普及啓発に努め、市民を始め多くの人々に理解してもらう。
- 「地域の財(たから)」の地域社会の中での保存・活用を推進していく。

● 「地域の財(たから)」の適切な保存

十日町市の文化財等には、既に指定されているものだけでなく、未指定のものも多く残されている。それらの豪雪とともに生きてきた先人達の営みの歴史の証や、現在の生活にも引き継がれている文化を「地域の財(たから)」として後世に継承していくために、文化財等の適切な保存を実施していく。

- | | |
|-----|---|
| 方 策 | ①文化財等の保存の推進
②調査・研究の継続
③保存整備と技術者・資材確保の推進 |
|-----|---|

①文化財等の保存の推進

②調査・研究の継続

③保存整備と技術者・資材確保の推進

● 「地域の財(たから)」の普及啓発

十日町市の歴史や文化の物証となる文化財等は、豪雪とともに生きてきた人々の生活の証であり、市民の生活に身近な存在であるものが多い。それらは、十日町市を訪れる人々にとって、非日常を体験できる大きな魅力となっている。そのため、それらを大切な「地域の財(たから)」として市民が理解し、継承していく意識を醸成するために積極的な普及啓発を推進する。

- | | |
|-----|--|
| 方 策 | ④博物館・資料館を通じた文化財等の活用
⑤学校教育・社会教育との連携
⑥一般公開の推進
⑦関連文化財群の保存・活用の推進
⑧地域の文化財等の保存・活用の拠点整備の推進（歴史文化保存活用区域の設定） |
|-----|--|

④博物館・資料館を通じた文化財等の活用

⑤学校教育・社会教育との連携

⑥一般公開の推進

⑦関連文化財群の保存・活用の推進

⑧地域の文化財等の保存・活用の拠点整備の推進（歴史文化保存活用区域の設定）

● 「地域の財(たから)」の地域社会の中での保存・活用

十日町市は、地域単位で固有の歴史や文化を有し、地域に点在する文化財等は、各地域で培われてきた歴史や市民の生活に密接に関わっている。そのため、市民自らが文化財等を保存・活用し、自分達が生活している地域の誇りとして後世に継承していけるための体制づくりを推進する。

- | | |
|-----|----------------------------|
| 方 策 | ⑨地域社会と行政の連携・協働に向けた体制づくりの推進 |
|-----|----------------------------|

⑨地域社会と行政の連携・協働に向けた体制づくりの推進